

# サンロク

アイス。



## サンロク（上）

---

それは想像以上に立派な校門だった。

「はあ...」

佐伯真実《さえきまみ》はため息をついた。

新学期が始まる前に一度顔合わせで訪れたことがあったが、そのときはこれほど大きくはなかったような気がする。

正直このまま逃げ出していまいたい気分だった。

しかし、ためらっていても帰ることが許されるわけではない。

真実は諦めて自分の職場となる校舎の中へと足を踏み入れた。さほど大きくはない都市の郊外にある、私立鈴川学園。今年で創立82年になる、地元では少し名の知れた高校だ。鈴川学園から常勤講師にならないかと申し出があったとき、真実はあまり深く考えずに喜んで承諾してしまった。教員採用試験に落ちたため、大学を卒業しても行くあてがなかったからである。

しかし、冷静に考えてみれば鈴川学園の申し出は、不自然なところだらけであった。真実は鈴川学園の卒業生ですらなかったのから。

職員室に入ると、どの教員も忙しくかけ回っていた。だが、この後の始業式を思っか、どこかわくわくしているようにも見える。

「おはようございます」

真実は職員室の入り口で挨拶した。

途端に全員の動きが止まる。

まるで職員室の中だけ時間が止まってしまったかのようなようだった。これから同僚として働く彼らは、不審そうな、同情するような目で真実を見た。すると、後ろから真実に声をかける人がいた。

「おはようございます。佐伯先生」

振り返ると、そこに立っていたのは年配の男性だった。

頭は白いが、ところどころ黒い毛が残っており、まだまだ現場で働けそうな、たくましい体つきだ。

「校長先生...。おはようございます」

真実はうつむき気味に答えた。

鈴川正《すずかわただし》はこの学園の校長である。鈴川は優しく笑い、真実に向かって手を招いた。

「校長室へどうぞ。一緒に始業式の打ち合わせをしましょう」

真実は不安そうな表情のままうなずいた。鈴川は真実に笑いかけると、先に立って職員室の前の廊下を歩き出した。真実も鈴川の後に続き、職員室の前の廊下を通り、校長室へと向かった。

校長室に入ると、鈴川は真実をゆったりとしたソファに座らせた。

「お茶でも飲んで気分を落ち着かせなさい。」

「あ、あの...大丈夫ですから...」

真実が止める間もなく、鈴川は自ら真実にお茶を淹れた。

「遠慮することはありません。ほら、温まりますよ」

鈴川の気遣いに、真実の心はようやく少し落ち着いてきた。鈴川も真実の向かいに座り、お茶を飲み始める。しばらくその状態のまま2人とも無言だったが、やがて意を決したように真実は口を開いた。

「あの...」

「なんですか？」

鈴川は穏やかな口調で答えた。しかし先ほどまでとは変わり、表情が少し強張っていた。

「私が担任をするクラスについて教えていただきたいんですけど...」

真実は、ほんの1ヶ月前まで学生だった身で、新任教師どころか常勤講師という身分だというのに、クラス担任をすることが決まっていた。

鈴川は笑みを浮かべたが、表情は硬いまだだった。

「大丈夫。何も心配することはありませんよ」

「でも...。生徒たちはみんな...あの...」

真実は必死に言葉を選んだが、うまい表現が見つからずに、ため息をついた。

「3年6組の生徒って...幽霊...なんですよ...?」

「.....」

一瞬静寂が校長室を包む。

今にも幽霊である生徒たちの笑い声が聞こえてきそうだった。

真実は不気味な思いに駆られ、急いで言葉を続けた。

「あ、でも確か無害なんでしたっけ？」

「あ、ああ...」

鈴川も我に返って答えた。

「昔からこの学園に住み着いてますが、特に問題が起こったことはありません」

鈴川は一息ついてお茶を飲んだ。真実も同じようにお茶に口をつけたが、温かいお茶でさえ真実の心をほぐすことはできなかった。

「何も起こらなかったのに、今回はどうして除霊をすることにしたんですか？」

「先月の顔合わせのときにも言いましたが、別に理由があるわけではないんです」

鈴川はゆったりと話した。

「ただ、生徒たちの保護者が気にしてしましてね...。生徒たちも何かうまくいかないことがあると、すぐに3年6組のせいにするんです。ここのままでは教育上良くないと思ったんですよ」  
真実は黙ってうなずいた。

「そこで、靈感があるというあなたに3年6組を見てもらおうと思ったわけです。幸い教員志望みただし、その希望を叶えることにもなるかと思ひましてね」

「そのお気持ちは嬉しいんですけど...」

これからのことを思うと、真実の鼓動はとても重い音を立てた。

「靈感があるといっても、除霊はやったことないですよ？本当に3年6組の霊を成仏させたいならプロの神主さんとかお坊さんに頼んだほうが良いと思うんですけど...」

「そのことなら心配することはないですよ。除霊といっても、すべてを佐伯先生に任せようというわけではありません。まずは佐伯先生に見てもらって、3年6組の状態について教えてもらおうと思っているだけなんです」

「私そこまでできるかわからないですけど...」

いよいよ心細くなり、真実は絶望感さえ感じ始めていた。鈴川は真実を元気づけるように明るく言った。

「大丈夫。教室の入り口から様子を伺うだけでもいいですから。あとのことはこちらに任せてくれれば適切な処置を考えますよ」

いまいち納得のいかない真実だったが、後に退くことはできない。他に仕事のあてもないので、まずはここで頑張るしかないのも事実だった。

そのとき、始業式の開始が近づいたことを知らせる鐘が鳴った。妙な話をしていただけに、真実と鈴川は驚いて体を振るわせた。

思わず顔を見合わせ、苦笑いを浮かべる。鈴川はゆっくりとソファから立ち上がった。

「そろそろ行きましょうか。佐伯先生は自己紹介がてら簡単なスピーチもありますけど、楽な気持ちでやってくださいね」

「は、はい...」

正直、スピーチに対する緊張などまったく湧いてこなかった。

真実の頭にあるのは、3年6組の幽霊のことだけだった。

\*\*\*\*\*

始業式が終わり、生徒たちは弾むように自分の教室へ戻って行く。みんな新しい1年に様々な期待を抱いているのだ。

しかし真実の足取りだけは重い。鈴川とともに3年6組へと向かう歩みはとても遅かった。これから幽霊の集団と対面するのだと思うと、体の震えが止まらなかった。

鈴川と一緒に付き添ってくれたところで、見えるのは自分だけなのである。恐ろしいものを見たとしても、それは自分1人の体験で終わってしまい、その苦しみを分かち合える人はいない。他の人からすれば、所詮他人事なのだ。鈴川のことさえ、今の真実には冷たい人間に見えた。

そんなことを考えているうちに、3年6組の教室がある廊下まで来た。真実は警戒して、一瞬足を止め、じっと息をひそめる。

「どうしました？大丈夫ですか？」

鈴川は驚いて声をかけた。

「すみません...。もし強い悪霊だったらここからでも危険な雰囲気を感じ取れるかと思ったので...」

真実はしばらく3年6組の入り口を見つめたが、邪悪な気配は何も感じ取れなかった。しかし、それでも恐怖のためか、変に緊張感が高まるのを感じる。

「さあ、行きましょう。佐伯先生」

「は、はい...」

ついに真実と鈴川は3年6組の教室の前に着いた。扉の窓から恐る恐る中の様子を伺うが、教室の中には誰もいない。だが、確実に何かの気配はあるのだった。

真実は鈴川の顔を見た。

鈴川は大きくうなずく。

ここまで来たのだから今更ためらうこともできない。真実は思い切って教室の扉を勢いよく開けた。

「先生が来たー！」

突然生徒たちの賑やかな声が響いた。

真実は予想していなかったできごとに体を萎縮させる。

「先生、俺たちの担任になったんだよね？」

「授業してくれるんでしょ？」

「私たちのこと見えるの？」

扉を開ける前までは、確かに誰もいない教室だった。

しかし、開けた瞬間生徒たちが真実に群がってきたのである。その瞳は他のクラスの生徒たちと同様に、新しい生活を思っけか、生き活きと輝いていた。

「え...えと...」

想像していたのと全く違う光景に、真実は戸惑いを隠せなかった。鈴川は怯えたように真実に声をかける。

「さ、佐伯先生...? どうしましたか？」

真実はなんとか冷静になり、鈴川を振り返った。

「生徒たちは私を歓迎してくれています。思っていたのと全然違って、みんな元気な子たちばかりのようです」

「そ、そうですか...」

鈴川はひとまず安心したようだった。そして急にそそくさと、この場から離れたいというような素振りを見せた。

「それじゃああとは頼みましたよ。何かあったら報告してくればいいですから」

「え、ちょっと...」

「まあ授業なんて適当でいいんで。それではまた放課後に」

真実が止める間もなく、鈴川は踵を返すと、振り返らずに廊下を歩いて行ってしまった。

「もう...無責任だなあ...」

途方に暮れていると、席を立てて真実を迎えた数人のうちの1人が心配そうに言った。

「先生、大丈夫? あの校長適当だからなあ」

真実は教室の生徒たちに向き直った。

「大丈夫だよ。びっくりさせてごめんね。実は私、この春から教員になったばかりで、わからないことだらけなの。いろいろ迷惑かけるかもしれないけどよろしくね」

自分でも驚くくらいの平常心を持って、真実は簡単に生徒たちに挨拶をした。3年6組の生徒

たちがあまりにも普通なので、すっかり落ち着きを取り戻していたのだ。そして同時に、鈴川への不信感が湧いてきた。3年6組の生徒が実際に見えない以上、怖がるのは仕方がない。だが、授業が適当でいいなどという発言はどうしても許せなかった。

どうやら、3年6組の生徒たちは、授業を心待ちにしていたようだ。その思いを裏切ることは真実には絶対にできなかった。また、自分に教員としての能力は一切求められておらず、とにかくこのクラスをどうにかしてほしいという投げやりな態度を垣間見てしまったのも、不信感の原因の1つだろう。

真実は生徒たちに向き直り、1人1人の目をしっかりと見回した。真実は自分を出迎えた生徒たちを座らせると、教壇に立った。

「改めて…。皆さんはじめまして。今日から3年6組の担任になった、佐伯真実です。みんなは…」

真実は一度言葉を切った。霊の中には、自分が霊であることに気づいてない者もいる。だが、この生徒たちは、自分たちが普通の人には見えないことを理解しているらしい。

「みんなは…自分たちがちょっと特別な存在だってこと、わかってるんだよね…？」

不安の表情を浮かべながら、真実はゆっくりと教室を見回した。やはり幽霊であることには触れないほうが良かったのだろうか心配だったのだ。そんな真実の心配とは裏腹に、生徒たちはあっけらかんと答えた。

「わかってるよ。誰も授業してくれないから俺たちすごく暇で」

そう言ったのは、教室の中央あたりに座ってる男子生徒だった。整った顔立ちをしており、儂げな眼差しが真実の目を引いた。

「そうだったの…えーと…」

真実は教卓の上に視線を落とした。普通の教室なら、教卓の上に生徒の席順表や、出席簿が置いてある。しかし当然ながら、3年6組の生徒たちの名前を知る手がかりは何もなかった。

「ごめん、名前教えてくれるかな？」

「俺？源次郎だよ」

今風の華やかな若者なのに、名前が古風なので真実は思わず笑ってしまった。

「源次郎君ね。名字も教えてもらえる？」

「名字はないよ。普通の農民の家出身だからね」

「え？」

一瞬何を言っているのか、真実にはわからなかった。

「農民…？どういうこと？」

「だから、農家の子は名字がないの。武士しか名字は名乗れないんだよ」

「今は良い時代になったもんだよなあ」

源次郎の言葉に続いて言ったのは、派手なメイクをした女子生徒だった。

「私のときはさあ、もう戦闘機やら爆弾やらどっかんどっかんって感じでえ。ホント命がいくつあっても足りないって雰囲気だったわ」

「ウメは死線をいくつも乗り越えて来たもんね」

源次郎は派手な女子生徒に笑いかけた。すると教室の1番奥の隅に座っている、とても髪の毛の長い女子生徒も口を開いた。

「みなさん大変な時代を生きてきたのですね。私のときは物語を読んだり、蹴鞠《けまり》をしたり、とても優雅でしたのよ」

「それはあんたのところだけだと思うよ、藤の宮。京都以外は戦とかも絶対あったって」

おっとりとした話し方をする女子生徒に対して、派手なメイクの女子生徒は笑いながらつつこみを入れた。

「ち、ちょっと待って。みんな何の話をしてるの？」

真実目は丸くして言った。すると源次郎は楽しそうに顔を輝かせた。

「俺は江戸時代に生きてたんだ。ウメは昭和初期に生きてたし、藤の宮は平安時代だよ」

「戦争もなんとかくぐりぬけてやったのさ」

派手なメイクの女子生徒が言った。外見とは裏腹に和風な名前なので真実はあっけにとられてしまった。

そんな真実を見て源次郎は無邪気な笑顔を浮かべた。

「先生、俺たちちゃんと先生の言うこと聞くよ。授業だってすごく楽しみにしてたんだ。これからよろしくね」

「あ、うん…」

非常識なことが次々と起こったため真実の思考はなかなか追いつかなかったが、このクラスの生徒たちが悪霊でないことはよくわかった。しかし、いくら悪霊でないとはいえ、この世の者ではないのにいつまでも留まっているのは、生徒たちにとってもあまり好ましくはない。どこまでできるかわからないが、生徒たちがふさわしい場所へ行けるよう手伝ってみよう。真実はどうか3年6組を前向きな気持ちで捉え始めた。

放課後、3年6組の様子を報告するため校長室に行くと、鈴川が朝のときと同じように優しい笑みで真実を迎えた。

「佐伯先生、1日お疲れ様でした。3年6組はどうでしたか？」

真実は鈴川の笑顔を見ると、ほっと安堵の表情を浮かべた。

「想像していたのとまったく違って、明るくていい子たちばかりでしたよ」

「そうですか。それではあのクラスにいるのは悪霊ではないということですね？」

「はい。悪霊ではないと思います」

正直なところ、真実は鈴川に対して悪いイメージを持ちかけていた。しかし、今では先ほどの鈴川の態度も許せる気持ちになっていたのだった。実際に霊が見えない人からすれば、自分の職場に幽霊がいるというのはとても恐ろしいものなのだろう。悪霊かどうか判断できず、どのように対応していいのかもわからないのだ。

だが真実には何となく避けたほうがいいものと、避けなくても危険はないものくらいの区別はつく。鈴川をはじめ、見えない人の立場になって考えてみれば、朝の職員室での同僚の態度も許せる気がした。

みんな怖くて仕方がないのだ。

この状況を変えられるのも自分しかないのだと思うと、真実はこの仕事がとても重要なものであるような気がした。

「もし3年6組の生徒たちが佐伯先生に懐きそうなら、プロに頼まなくても成仏させられるんじゃないですか？」

鈴川は遠慮がちに聞いた。

「それはどうでしょうね…。でも放っておいても、すぐに何かが起こるということはないと思うので安心してください」

「そうか…。ありがとう。佐伯先生に見てもらったおかげで私もだいぶ気持ちが楽になりましたよ」

「私は何もしていませんが…。とりあえず、これから3年6組についていろいろ知っていきたいと思います。そうしたら、彼らが安らげる場所にいく手がかりもつかめると思いますし、もしかしたら私でも成仏させてあげられるかもしれません」

「ええ。よろしくお願いします。私もできる限りの応援はしますから」

真実はにっこりと笑ってうなずいた。朝はあれだけ不安だったというのに、今となっては他の同僚や生徒たちと同様に、これからの新しい生活を思って、期待に胸を膨らませるほどだった。

\*\*\*\*\*

この学校には、各学年5クラスずつしか存在していない。3年6組は、3年5組の隣にあった大きな資料室を教室として改造したものだだった。

学校で幽霊が目撃されるようになったのはもう随分前のことらしい。生徒や保護者から霊の祟りを鎮めるよう様々な提案を受け、最終的に3年6組という教室を作り出すことになったようだ。

1週間ほど3年6組を観察しながら、真実が生徒たちが然る場所へ行くための手がかりを探していた。

今日もいつもと同じように、朝のホームルームから1日が始まる。

「みなさん、お立ちになってください。先生、おはようございます」

今日から週番を務めるのは藤の宮と、気が強そうな男子生徒だ。藤の宮の号令に合わせて、生徒たちは朝のあいさつをした。

「週番なんて最初に聞いたときは何のことかまったくわかりませんでしたけど、みなさんのお役に立てるというのは気持ちがいいものですね」

藤の宮のおっとりとした様子に、思わず真実も笑顔になった。

「藤の宮さんは働き者だね。黒板消したり日誌書いたり、週番はいろいろ大変だけど頑張ってるね」

「ええ。喜んで働きますわ。生前は周りの方たちにお世話してもらってばかりでしたが、自分で動くということも楽しいですね」

藤の宮は他の生徒たちとは明らかに違う雰囲気を持っていた。彼女は平安時代に生きた姫で

ある。そのことも少なからず要因ではあるが、真実には別に理由があるように感じられた。藤の宮が週番の仕事を楽しんでいる一方で、もう1人の週番はまったくこの仕事を歓迎してはいなかった。

「ホント、藤の宮はお気楽だよなあ。俺は週番を楽しいなんて思ったこと1回もねえけどな」

見た目の通り、その男子生徒は気の強そうな話し方をした。真実はちょっと戸惑いながら男子生徒を見た。

「えっと...貴文《たかふみ》君は週番やったことあるの？」

貴文は表情を和らげ、代わりにいたずらっぽく目を光らせた。

「あ、俺7年前にこっち側の人間になったばかりだからさ。生きてれば先生の2つ年上だよ」

「えっ。そうなの？」

真実は教卓から身を乗り出した。自分と同じ時代に生まれ、生きていた霊がこの教室にいるのは意外だった。

「うん。言うておくけど俺は他の生徒と違って悪霊だから。あまり気を許さないほうがいいぞ？」

「悪霊？」

じっと目を凝らして貴文を見つめるが、禍々しいものは微塵も感じられない。なぜ自ら悪霊などと言うのかわからず真実は困惑の色を浮かべた。そんな真実を見て、源次郎は笑いながら言った。

「そいつただのアホだから気にしなくていいよ」

「ふざけんなよ。俺はマジで言ってるんだぞ」

貴文は斜め後ろに座っている源次郎を振り返った。この2人は普段から仲が良く、休み時間もよく一緒に話している姿を見かけていた。しかし、源次郎と貴文は、3年6組の中でもトップクラスの霊力の強さである。そんな2人を見ていると、ときどき真実は眩暈を起こしそうになるのだった。

「は、早くしないとホームルーム終わっちゃうから連絡事項だけ済ませちゃうね」

少し顔色が悪くなった真実を見て、源次郎と貴文はすぐに大人しくなった。やがてホームルームを終えると、生徒たちが授業の準備をする中、藤の宮が真実のもとへ来て言った。

「先生、あとでお伝えしておきたいことがありますの。お昼休みは中庭でご一緒いたしませんか？」

「え？一緒にごはん食べてくれるの？」

生徒と一緒にごはんを食べれるなんて、真実には夢のようだった。学生時代に思い描いていた教員生活が、まさに理想通りに実現していく気がした。

「ええ。わたくしのお話聞いてくださる？」

「もちろん何でも聞くよ。じゃあ1時間目始まっちゃうからまたあとでね」

真実は自分で作った出席簿を閉じると、扉へと向かった。

教室を出た瞬間、まるで音を奪われたかのように、真実の世界には一瞬の静寂が訪れる。しかしその後すぐに、何事もなかったかのようにいつもの光景が目の前に広がる。

この現象も、真実の眩暈の原因の1つだ。

振り返って教室を覗き込むと、そこにいるはずの生徒たちの姿はまったく見えない。

彼らはこの世の者ではないのだと、改めて感じる。

常勤講師として雇われた真実は、他のクラスの授業も受け持っていた。1時間目の授業は、3年2組で行うことになっている。ホームルームから授業まではあまり時間がないので、真実は早歩きで職員室へ向かい、授業の準備を始めた。

授業開始の鐘が鳴る。

真実は3年2組の前で、教室に入るのをためらっていた。3年生のクラスで授業をするときは、いつも戸惑ってしまう。生徒たちが受験を控えているので、教室に緊張感があるのは当然だった。しかしそれ以上に、彼らは明らかに真実に対して、ある意味で特別な感情を抱いているのだ。

真実にはそれがなんとなく居心地が悪かった。

「起立。礼」

真実が教室に入ると、週番が号令をかけた。あいさつを終えると、真実は自分の気持ちを生徒たちに悟られないようにしながら、教室を見回した。

「この前現代文の教科書を持ってきてって言ってたよね。みんな忘れずに持って来れた？」

真実の呼びかけに生徒たちは黙ってうなずいた。奇妙なものを見るような眼差しが真実に注がれる。真実はため息をつきそうになるのをこらえ、教科書を開いた。

「それじゃあ最初の単元からいくね」

生徒たちも教科書を開き、単元の内容に目を通す。だが、その間にも数人の生徒はときどき顔をあげて、真実の様子をうかがってるようだった。

真実はどうしてもこの空気が好きになれなかった。みんな真実が3年6組の担任をしていることは知っているのだ。その事実が、他の生徒たちにどんな感情を抱かせているのか、真実には全く見当がつかなかったが、良く思っていない生徒も中にはいるだろう。

そう思うと、真実は逃げ出したいような気分さえなった。そのせいか3年2組で授業をしている間、何度も時計を見て時間がどれくらい進んだか確認してしまい、授業の内容もよくわからない、中身の無いものになってしまった。

\*\*\*\*\*

今日はとても天気がいい。外で食事をするには申し分ない暖かさだった。真実が中庭に行くと、藤の宮はもう座ってお弁当を広げていた。

「お待ちしていましたわ。風が気持ちいいですわね」

「そうだね。なんかすごく平和な感じ」

校長である鈴川の趣味か、中庭は芸術家を作ったのかと思うほどに美しかった。

桜の優しい色に包まれながら、2人はお弁当を楽しんだ。

「藤の宮さんも、ごはん食べたりするんだね」

「ええ。生きているときとは少し違いますけど、ちゃんとおいしさも感じていますわ」

「なんか不思議だね。おなか空いたりするの？」

「人によるみたいですが、わたくしは食べなくても平気ですの。本当、不思議ですよね」

幼い頃から霊が見える真実ではあったが、さすがに食事をもにしたのは初めてである。いろいろ疑問はわいてきたが、幽霊も食事を摂るという事実をそのまま受け止めることしか真実にはできない。

「それで、何の話をしてくれるの？」

「ああ、そうでしたわね。少しでも佐伯先生のお役に立つのなら、伝えなくてはと思って」

藤の宮はお茶を飲み一息ついた。

「先生は、やはりわたくしたちを本来いるべきところへ導くつもりなのかしら？」

「え？まあ...」

恐らく藤の宮は、自分たちを成仏させようとしているのかどうかを聞いているのだろう。できれば成仏させてやりたいが、真実自身は霊が見えるだけで、何か特別な技術を持っているわけではない。

「私もみんなの力になりたいとは思ってるんだけど、今の時点では正直どうしたらいいのか全然わからないんだよね」

真実は困った顔をしてうつむいた。藤の宮は優しく真実の手を握った。

「わたくしたちは、あなたが来てくれただけでとても嬉しく思っています。でも、先生が手がかりを望むなら、わたくしも先生のお手伝いができるかもしれません」

「手がかり？」

真実は藤の宮の目を覗き込んだ。

「この世からみんなを解放する手がかりってこと？」

「ええ。実はわたくしたち、たった2人の人の想いに惹かれて集まってきただけなんですの。だから、その2人が自由になれば、3年6組全員があの世界へ行けると思うんです」

「2人？」

すぐにその2人の顔が思い浮かんだ。

「源次郎君と貴文君？」

「ええ」

あの2人の想いの力は尋常ではない。この世にはっきりとした未練を抱えているからこそ湧き出す霊力なのだ。

「それじゃあ、藤の宮さんもあの2人に惹かれて来たの？」

「わたくしは源次郎さんの想いに惹かれたんですの。彼が一体何を抱えているのかはわかりませんが、なんだか切ない気持ちが伝わって、放っておけなくて...」

「うーん...」

真実は腕を組んで考えた。藤の宮の言っていることが本当なら、なんとか自分の力で解決できるかもしれない。まずは2人の未練の内容がわかれば、糸口がつかめるかもしれないのだ。

「ありがとう、藤の宮さん。どこまでできるかわからないけど、とりあえず源次郎君と貴文君に

話を聞いてみるよ」

「そうですわね。お役に立ててよかったですわ」

「あれ？でもさあ…」

聞いていいのかわからず真実は躊躇したが、どうもこの幽霊たちはあっさりしているようなので、思い切って口に出した。

「藤の宮さんが源次郎君に惹かれたなら、江戸時代までは別な理由でこの世から離れられなかったってことだよ。それはなんでだったの？」

すると藤の宮は小さく笑って言った。

「確かに、多くの方は、普通はこの世での役目が終わったら、迷わずふさわしい場所へ行くみたいですね。わたくし、何かに一生懸命な人を見ると、つい見届けてしまいたくなくなってしまいうんですの」

「じゃあいろんな霊とか人とかを見守ってるうちに平成にまで来ちゃったわけね」

「ええ。ちょっとのんびりしすぎてしまいましたわ」

生を終えてから千年以上この世に留まっていたことを、のんびりなどという一言では到底片付けられないように真実は思ったが、なんとなく藤の宮が異質に感じられた理由がわかったような気がした。他の生徒たちに比べると遥かに長い時間を経験した藤の宮は、物事をどこか外側から見ているように思えた。

真実はお弁当を片付けると立ち上がった。

「ありがとね。とりあえず放課後あの2人に話を聞いてみるよ」

帰りのホームルームが終わると、源次郎と貴文は真実に言われたとおり、多目的室に来ていた。

「ねえ、呼び出してくれたのはいいけどなんで貴文も一緒なの？俺と2人きりじゃなくていいの？」

源次郎は机に頬杖をつきながら、挑発的な目で真実を見た。ここ1週間ほどでわかったことだが、どうやら源次郎は軽いところがあるらしい。

一方の貴文は、偉そうに脚と腕を組んで言った。

「説教なら勘弁してくれよ？俺そういうめんどくさいこと嫌いなんだよ」

真実は2人の前の席に座りため息をついた。

「まったく、あんたたちはあつけらかんとしてていいよね」

「俺だって悩むことくらいあるぞ？」

貴文は胸を張った。

「早くあの世に行きたいのに、復讐がまったく進まないこととかな」

「あ、その話を聞きたいのよ」

真実が言うと貴文は喜んで身を乗り出した。

「何？俺がこの世をどれだけ恨んでるかを聞きたいわけ？言っておくけど、悪霊を甘く見ないほうがいいぞ？いくら真実先生でも容赦なく呪うぞ？」

さすがにこう言われると、少し気味が悪くなり、真実は源次郎を見た。

源次郎は紳士的な微笑を浮かべて真実の頭をなでた。

「大丈夫大丈夫。朝も言ったけど、こいつ口だけだから」

「どさくさに紛れて頭を触るのはやめなさい」

どこまでも軽い源次郎に、半ば真実はいちいち呆れ返った。

「藤の宮さんに聞いたんだけど、貴文君は何か未練があってこの世を離れられないんだよね？よかったら私に話してくれない？何か力になれることがあるかもしれないし」

真実が怖がらなくなってきたせいか、貴文は少し拗ねながら言った。

「先生が手伝えることなんてねえよ。これは俺の問題なんだから」

「そうかもしれないけど、何かやり残したこととか、誰かに伝えたいことがあるなら、生きている人の力を借りたほうが絶対にいいでしょ？」

貴文はうなりながら源次郎を見た。源次郎も、先ほどまでとは違って、真顔になっていた。

「いいじゃん、話してみなよ。真実ちゃんならいいと思うよ」

一瞬、教師をちゃん付けで呼ぶ源次郎のあまりの軽さに真実はまた注意をしたくなかったが、貴文が話しそうなのでそこはぐっと堪えた。

「俺...本当に恨んでるやつがいるんだよ」

「え？本当に？どんな人なの？」

「...創路っていない？中島創路《なかじまそうじ》...」

「どこによ？あれ、でも聞いたことあるような...」

真実はあっと声をあげた。

「もしかして、数学の中島先生？3年2組担任の...？」

「ああ。いつも職員室で陰気なオーラ振りまってるだろ？」

「陰気っていうか...」

さすがに先輩教員を悪く言うわけにもいかず、真実は口ごもった。

「あいつ俺の幼馴染なんだよ。まあ仲悪かったんだけどさ」

「えっ。幼馴染？」

世間は狭い。あの世とこの世に隔てられている2人だが、もとはご近所さんだったということだ。

「何かされたの？いじめとか？」

「いや、そうじゃなくて...」

貴文は言わずにそうな顔をした。

「俺の葬式...来なかったんだよ。小さい頃はよく遊んだのに...。いつから俺のことそんなに嫌いになったのかなって思ったら、なんか許せなくてさ」

真実も貴文と同じように気まずい表情になった。いくら貴文が気丈な性格でも、やはり自分の葬式のときのことなど思い出したくはないだろう。それを話させてしまったことが、なんとなく申し訳なかった。

「それで貴文君は、中島先生が気になってこの学校に来たんだね」

「まあな」

貴文は少し俯いて黙り込んでしまった。

真実は次に源次郎の話に移った。

「で、源次郎はどうしてこの世に留まってるの？」

「えー。なんで俺は呼び捨てなのー？」

「そんなこといいから。早く教えなさい」

もはや真実にとって、源次郎は気を使って話す対象ではなかった。

「うーん…。そう言われてもなあ…」

「言いたくないことなの？」

「そういうわけじゃないんだけど…」

源次郎はふと寂しげな表情を浮かべた。

戸惑う2人を見かねた貴文が、真実の顔を覗き込むようにして助け舟を出した。

「源次郎は自分でもわかってないんだよ。なんでこの世界に引きつけられてるのか」

貴文の言葉に、真実は驚いて顔を上げた。

「そうなの？」

「うん…。あっちの世界に行ってもいいんだけど、なんかまだ時期じゃないような気がするんだよね…」

真実は座り直して大きく息を吐いた。思っていたよりも問題は難しそうである。

「とりあえず、理由が明確な貴文君のほうが解決しやすそうだね。源次郎のほうは時間かかりそうだけど、一緒に考えていこう」

源次郎と貴文は黙ってうなずいた。その表情は、それぞれが自分の思いに沈んでいるようだった。そんな2人の様子を見ていると、真実は不安と同時に使命感を感じた。自分にできることはそれほど多くはないだろう。しかし、この2人が頼れるのは恐らく自分しかいない。真実はそんな思いを強く抱いた。

それから数日間、真実は中島の後をつけ回すような行動をとっていた。

中島創路は真実の2つ年上で、本来ならその若さにふさわしい活気を持っているはずの男性だった。だが実際は、同僚とは必要最低限のコミュニケーションしかとっておらず、生徒からも何となく避けられているような存在だった。

昼休み、いつもの通りさりげなく中島の後について廊下を歩いていると、向こうから3年2組の女子生徒が歩いて来た。

確か、古谷《ふるや》ちいこという名前だったはずだと真実は思った。

とても小柄で、見た目は小学生のようだ。

ちいこは中島とすれ違うとき、下を向いて目を合わせないようにしているようだった。すると、ちいこの少し後ろから大人しそうな女子生徒が歩いてきた。

ちいこの後を追いかけて来たのだろう。彼女も3年2組の生徒だ。自分が授業を受け持っているクラスの生徒なので、真実が必死に名前を思い出そうとしていると、前を歩く中島が口を開いた。

「真篠」

真篠愛《ましのあい》。

学年でもトップクラスの成績で、手がかからない生徒だと同僚から聞いていた。中島に名前を呼ばれ、怯えたように立ち止まっている。

「さっきの授業、ちゃんと聞いてたか？」

「……………」

愛は小さく縮こまり、無言で頷く。ちいこも愛を振り返り、何も言えずに2人のやりとりを見ていた。

「じゃあ期末テストは完璧だな。満点じゃなかったらどうなるかわかってるんだろうな」

中島は威圧的な態度で冷たく言い放つ。同僚である真実でさえ立ちすくんでしまった。愛は怖いのか、何の反応も示さず固まっている。

「他人に必要として欲しければ自分で存在価値を作るんだな。価値のない人間など生きていてもしょうがない」

それだけ言うと、中島はすたすたと歩き去ってしまった。教員とは思えない言葉に呆然とし、真実の思考は止まっていた。中島と愛を見ていたちいこも困惑しているのか、愛に声をかけることなくただ眺めている。

授業開始の鐘が鳴った。

ちいこも愛ははっとしたように顔を見合わせると、何も言わずに廊下を走り去った。恐らく真実の存在には気づいていたのだろうが、一切こちらを見ることはなかった。

「ちいこ…」

突然隣から声が聞こえたので、真実は一瞬飛び上がって驚いた。

「わっ。ウメちゃんかあ。急に出て来ないでよお」

真実は気が抜けるような声を出した。そんなことはお構いなしに、ウメは話し出した。

「あいつ、友達が苦しめられてるのにまったく助けようとしなないんだよなあ。昔からだけど甘ったれてるっていうか…」

「え？何？」

授業に行かなければという焦りを感じ、混乱しながら真実は聞いた。

「ちいちゃんのこと知ってるの？」

「ああ。あれは私の孫だからな。赤ん坊のときはかわいがったもんだよ。まあ、あの子が物心つく前に私はこっちの世界に来ただけだ」

貴文と中島の関係といい、世間は本当に狭い。

しかしあの小さなちいこが、この派手なメイクのウメと血縁関係にあるだなんて、素直には信じられなかった。

「ウメちゃんにはあまり似てないんだね」

「そうだな。私に似てたらもっとたくましくなっていたんだらうけど」

ウメはため息をついた。真実もつられてため息をつく。貴文の心残りを晴らすためにはどうしても中島と話をする必要がある。あんな姿を見たあとでは、まともに取り合ってくれるような気すら起きなかった。

\*\*\*\*\*

春の半ば。

放課後の陽気がとても心地いい。

それなのに、どこかの教室から小さな泣き声が聞こえていた。廊下をふらついていた源次郎は、その泣き声のする方へ導かれるように歩いていく。行き着いた先は3年2組の教室だった。そっと教室をのぞき込むと、愛が机に突っ伏していた。他の生徒はみんな部活に行っているのか、誰もいない。

最近の源次郎には見慣れた光景だった。学年が上がって受験を控えているせいか、中島の愛への態度は強くなってきていた。

源次郎はいつものように愛の前の席に腰をかけ、愛と向かい合った。

「愛ちゃん。中島の言うことになんか負けちゃだめだよ。あんなやつの話聞くことないよ」

聞こえないとはわかっていたが、なんとか声をかけずにはいられなかった。すると、ちいこが教室に入ってきた。愛を見るなり悲しそうな顔をして、隣の席に座った。

「中島先生に何か言われたの？」

おずおずと話しかけるが、愛は何も答えない。しばらくそうしていると、今度はウメが教室に入ってきた。ちいこを探していたようだが、源次郎を見つけると隣の席に腰掛けた。普通の人には見えないが、まるで4人が輪を作って何か話し込んでいるようにも見える。

「中島、なんとかなんないのか？」

ウメは源次郎をにらみつけるようにして言った。

「俺に言われても…。貴文のほうが中島先生のごことはよく知ってるみたいだしね」

どうすることもできない状況に、2人は歯がゆい思いだった。

「元気出して。愛には愛のいいところがあるよ」

「……………」

愛にはちいこの言葉が届いていないのか、黙り込んだままだった。ウメは耐えかねたように机を叩いた。

「ちいこ！あんたもうちょっと他にできることあるでしょ！慰めるだけじゃなくて、もっと考えてみなよ！」

源次郎は慌ててウメをなだめた。

「まあまあ。ちいこちゃんはよく頑張ってるよ。そばにいて慰めることだって簡単にできるわけじゃないんだし…」

「でもさあ…！」

ウメにはわかっていた。

ちいこだけでなく、誰もが同じことをしていた。

愛が頭を悩ませている原因が中島にあることは明らかだ。だが誰も直接中島に反論するものはいなかった。大人同士ならとにかく、高校生のちいこがそんな勇気を持っているはずもなかった。

「愛、今日はもう帰ろう。カラオケにでも行って、気分晴らそうよ」

「うん...」

ちいこと愛は立ち上がった。まだ暗い表情の愛を見上げて、またちいこは優しい言葉をかけるが、愛は愛想笑いをするだけだった。

「ちいこが大きくなるまで私が生きていたらな...。もっといろいろなこと教えられたのに...」

ウメが呟いた。あまりの寂しげな声に、源次郎はウメの肩を抱いた。

「ウメ、これが運命だったんだよ。俺たちは見守ることしかできないけど、うまくいって信じよう。想いの力が俺たちの最大の武器なんだから...」

源次郎は言いながら顔を上げた。一瞬、振り返っていたのか、ちいこと目が合ったように思えたが、すぐに背を向けられてしまったので偶然なのかどうかはわからなかった。

\*\*\*\*\*

5月になる頃には、真実が3年6組の生徒たちともすっかり打ち解け、授業も少しずつこちなさがなくなっていった。

また、他のクラスの生徒たちとの交流が増え、徐々にこの学校の状態が明らかになってきた。進学率の低下、校内外でのいじめや暴力、不登校や保健室登校をする生徒の増加など、思った以上に問題が多いようだ。

しかもさらに問題なのが、その原因をすべて3年6組のせいにしてしていることだ。真実はそんな話を聞いたときに、「学校がしっかりしないのがいけないんじゃない」と生徒たちに言うのだが、生徒たちは、「悪霊がいるから悪いことが続くんだよ。なんか学校の空気も悪いもん」と言うので、いよいよ問題は深刻だった。

同時に相変わらず中島の様子をうかがったり、源次郎の心残りを探っていたが、こちらのほうでは進展の気配はなかった。赴任当初からの真実のそんな動きを不思議に思っていた鈴川は、教頭の渡辺健一を校長室に呼びつけ、自分の疑問について意見を求めた。

「佐伯先生のことだが...。どう思う？本当に3年6組を祓うつもりだろうか？」

「祓うつもりだと思いますよ」

渡辺は笑っているのか、意地悪そうな顔を醜く歪めた。

「どうします？本当に3年6組がいなくなったら、ちょっとまずいですよねえ」

「声が大きいぞ」

鈴川は鋭く渡辺を制止した。その目は普段の鈴川からは想像できないような、邪まな光を放っていた。

「保護者が除霊しろとうるさいから靈感があると噂の学生を講師として雇ったが、本当に靈感があるとはな...」

黒く光るソファに深々と身をうずめ、鈴川はため息をついた。

「まったく...ここの学校は生徒も親も同僚もばかばかりで困る。3年6組の祟りをネタにすれば少しは言うことを聞くが、それがなくなったら大変なことになるだろうな」

「校長はわがままですねえ。そのネタも苦情がくるようになったから佐伯先生を雇ったんじゃないですか。すべてを除霊ができない新米講師の責任にするために」

鈴川はあきれたような目で渡辺を見た。

「それは除霊できなかつたら話だ。彼女がクレームの標的になるはずだった。しかし実際は違う。3年6組を除霊し、佐伯真実は英雄のように扱われるだろう。しかも、今まで3年6組のせいにする事で回避していた文句なんかも全部まともにとりあわなきゃないんだぞ。ばかの相手はしてられんよ」

「じゃあどうしますか？」

低い声で鈴川が唸る。そして、軽い調子で渡辺に聞いた。

「おまえ、佐伯真実がいなくなるのと、3年6組がいなくなるの、どっちがまずいと思う？」

「そりゃあ3年6組がいなくなったほうがまずいでしょう。新米講師なんかよりずっと使えませうからね」

「そうだな」

満足げに鈴川はうなずいた。

「彼女には学校をやめてもらおう」

「ほう。強気ですねえ。しかしやめてもらうとなると保証金などいろいろめんどうですよ。懲戒免職にするにしても理由が必要ですし...」

「もちろんこちらから頼んでやめてもらうわけではない。彼女がやめたくなるような環境を作るのだ」

「ええ？」

渡辺の間抜けな声が校長室に響いた。鈴川は落ち着いてお茶に口をつける。渋い味が舌に心地いい。

「簡単なことだよ。全校生徒を彼女の敵に回せばいいのだ。あいつらはばかだから簡単に思い通りになるさ」

「敵に回す...？」

「つまりな...」

その日から鈴川と渡辺は様々な生徒たちと積極的に関わるようになった。つまらない世間話にもつきあい、めんどうな進路相談にもつきあった。そして、必ずそのときに生徒に言うことがあった。

「いいか、3年6組には気をつけるんだぞ。君たちは怪談のように話しておもしろがってるが、佐伯先生が来てからは笑い話ではなくなってきた」

今日も鈴川は、初夏の風が吹く渡り廊下で立ち話をしていた。3人の男子生徒はお互いの顔を見合わせ、驚いた表情を浮かべている。

「笑い話じゃなくなったって...どうということですか？」

「気がつかないかい？最近佐伯先生は、中島先生の後をつけているように見えないか？」

「うーん...。そう言われてみれば...」

特別教室へ移動する途中だったのか、生徒は持っていた筆記用具を持ち直した。

「それに…」

鈴川は生徒たちの顔を覗き込んだ。

「佐伯先生はどうも独り言が多い。幽霊と話をしているようだが、不穏なことを相談しているようにしか聞こえないのだよ」

「不穏なこと…？」

生徒たちは不安そうに呟いたあと、恐る恐る鈴川に聞いた。

「誰かを呪うとか、あの世へ連れて行くとか…そういうことですか？」

頭の固い鈴川に比べ、生徒たちの想像力はとても豊かである。

「私にも詳しいことはわからないが、恐らくそういうことではないかと思う。君たちも気をつけるんだぞ。油断したら何をされるかわからない」

こうして鈴川は、真実がさも不気味な存在かのように仕立て上げていった。

鈴川たちの作戦は見事に成果をあげていった。生徒たちは怯えた目で真実を見るようになり、さすがの真実も異変に気づき始めていた。

\*\*\*\*\*

「うーん…」

桜の季節が終わり、青々と中庭の木々が茂る日の放課後、真実は教卓に肘をついて考え事をしていた。3年6組の生徒たちはどこへ行ったのか、姿は見当たらなかった。

しばらく目を閉じていた真実だったが、やがて考え続けることを諦め目を開けると、目の前に源次郎の顔があった。

「悩んでる真実ちゃん、かーわいい。まつげ長いねえ」

へらへらと笑う源次郎を見て、真実はため息をついた。

「いつの間にいたの？いいから女の子と遊んで来なさい」

「普通自分の生徒にそういうこと言う？」

源次郎は相変わらず笑っていた。真面目に向き合うのもばからしいので、真実は気持ちを切り替えて体を起こした。すると突然源次郎は真剣な声で言った。

「何悩んでるの？俺、こんなんだけど、話くらいは聞くよ？」

「何をいきなり…」

真実は言葉を切った。

源次郎の瞳はいつもの彼のものとは違った。その年齢には不相応なほどの深い色を浮かべており、まっすぐに真実を見ていた。

「まあ…たいしたことじゃないんだけど…」

よく考えてみれば、源次郎は江戸時代の人間であり、捉え方によっては真実の大先輩でもある。自分1人で抱え込んでいても仕方がないので、真実は思い切って先ほどまで考えてみたことを話すことにした。

「最近生徒たちの様子がおかしいのよね。なんだか避けられているような、よそよそしいよ

うな…。5月に入ってからは、授業も少しはうまくなったと思ってたんだけどなあ」

真実はまだ教卓に肘をついた。源次郎は真剣な表情のまま、何かを考えていた。

3年6組には誰も入ってくる気配もなく、2人の沈黙が続いた。

「なんか…。俺心当たりあるかも」

言いにくそうに、少しためらいながら源次郎は言った。

「鈴川と渡辺がいろんな生徒に変な話してた。俺たち3年6組のことを言ってるのかと思ってたけど、もしかしたら真実ちゃんのこと悪く言ってるのかも…」

「ええ？」

意外なことを言うので真実は目を丸くしたが、はっとしてすぐに源次郎に注意を促した。

「ってあんた。鈴川先生と渡辺先生でしょ。何偉そうに呼び捨てにしてるの」

「真実ちゃんは固いなあ」

ようやく源次郎は顔を綻ばせた。その一方で、真実はますます頭を抱え込む。

「でもなんで？そりゃあ私、全然除霊進んでないし、悪く言われるのはしょうがないけど、何もみんなに言いふらさなくてもいいと思うんだけどなあ」

どこか呑気そうな真実を見て、源次郎は半ば呆れつつ言った。

「いや、真実ちゃんの除霊が進んでないのは関係ないと思うよ。どうして鈴川たちは真実ちゃんを悪く言うと思う？」

やはり真実はピンと来ないようで、不思議そうな顔で源次郎を見つめる。その表情には、いかにもついこの間まで学生でしたというようなあどけなさが残っていた。

「もー。真実ちゃんは人が良すぎるよ。あいつらの狙いは真実ちゃんを悪く言うことそのものなんだよ」

「え？なんで？」

「たぶん、この学校にいてほしくないんだと思う。除霊を頼んだのはいいけど、除霊をしてほしくないとか…」

「ええ？なんなの一体？」

混乱する頭で、真実は鈴川たちが除霊を嫌がる理由を考えた。源次郎のほうは、恐らくもう答えを持っているのだろう。

黙って真実を見つめていた。

「もしかして…」

真実は生徒と交わした会話を思い出した。進学率の低下、いじめ問題の深刻化、学校のすべての問題を3年6組のせいにしてしている鈴川学園の生徒たち。

そんなふうを考えるようになった原因はどこにあるのだろうか。

生徒たち自らがそんなことを考え出したのだろうか。

直感的にはあるが、真実にはそうは思えなかった。

「鈴川先生は、3年6組を利用していたの？何か悪いことが起きると、すべて3年6組のせいにして…」

その考えにたどり着いた瞬間、真実は体を震わせ始めた。傲慢な鈴川や渡辺への怒りと、人間

のずる賢さへの恐怖で、真実の震えは止まらなかった。

「ま、真実ちゃん、大丈夫？」

さすがの源次郎も驚き真実の肩に手を置いた。真実の肩から伝わる温度はとても熱かった。

真実は勢いよく立ち上がった。

「許せない！3年6組の生徒をこの世に縛りつけてるのは鈴川先生や渡辺先生じゃないの！」

「あー、そうなのかな？えーと、そこまではわかんないけどね」

源次郎は真実を落ち着けるように手をひらひらとさせた。

「なんでわざわざ私に除霊を頼んだのか理解できないけど、すごく理不尽だよ。そんなの絶対許せない。源次郎、必ず私が解放してあげるからね」

そのとき、突然真実の視界が揺らいた。

鈍い痛みが頭の中を突き抜ける。

教卓に手をつきよめく体を何とか支えて顔を上げると、そこにはもう源次郎の姿はなかった

。

「あれ...？源次郎...？」

ふと入り口を見ると、鈴川が不審そうな目で真実を見ていた。

「佐伯先生、大丈夫ですか？」

鈴川が教室の扉を開けたことで、教室は源次郎がいられる空間ではなくなってしまったのだろうか。まったく気配が消えてしまっていた。

「佐伯先生？」

もう一度鈴川が真実に声をかけた。真実は一瞬何が起きているのかわからずに、ぼんやりと鈴川のほうを見た。

「大丈夫ですか？」

「あ...はい...」

3年6組の生徒を苦しめている原因である鈴川。そんな彼を目の前にすると、何となく警戒心を抱かずにはいられなかった。

「佐伯先生、少し話があるので、校長室に来てもらえませんか？」

「話...ですか...」

除霊が進んでいないことを責められるのか、それとも別な件でもあるのか、真実にはまったく予想がつかなかったが、いずれにしても良い予感ではなかった。

## サンロク（下）

---

薄暗い校長室で、鈴川と真実がソファに座り向き合っていた。

古いせいか部屋はかび臭く、じめじめしているような気さえた。真実の目の前には1枚の紙が用意されていた。

「...何ですか？これ」

「気を悪くしないでください。こうするのが1番なのです」

その紙の左上には、退職届の文字が印刷されていた。

「どういうことですか？ちゃんと説明してください！」

真実は両手で強くテーブルを叩き、鈴川を睨みつけた。

「もちろん説明しますとも。まずは落ち着いてください」

鈴川は威厳を保とうとするかのように、やけに冷静ぶって言った。

「実は、保護者からの要望が多くなってきたのです。私も佐伯先生を守ろうと必死だったのですが...」

「要望ってどんな要望ですか？」

身を乗り出して話を聞く真実に、一瞬鈴川は気圧された。

「そ、それは、やめさせてほしいっていう要望ですよ」

「どうしてですか？」

「いえいえ、佐伯先生は悪くないですよ。ただやはり保護者の皆さんも3年6組が気にかかるようでして...」

「うちの生徒は何も悪くありません！」

真実は必死になって訴えた。

「悪霊でもないし、学校に悪い影響をもたらしたりもしません。お願いですからもう少し時間をください」

「それは私も保護者の方々にお話したのですが...」

鈴川はさも悲しそうに頭を振った。鈴川学園の生徒たちには3年6組を悪しきものとして話したのは鈴川である。その話が保護者にまで伝わったのだろう。そうなれば、保護者が真実のことを気味の悪い教師と考えるのも当然である。

真実は絶対に退かないつもりで鈴川に食い下がった。

「このまま3年6組を放っておいていいんですか？私がいなくなったところで今までと何も状況は変わらないんですよ？」

「確かに、この学校が呪われていることには変わりありません。しかし、佐伯先生が来てから問題は大きくなってしまいました。こちらとしても辛い判断なのです」

「でも...」

問題を大きくしたのは鈴川本人である。何もかもを3年6組のせいにし、それができなくなってきたら新卒の講師のせいにし、それもかなわないので、今度は新卒の講師を排除しようというのだ。

真実は本音を言ってしまいましたかった。

おまえの企みはすべてわかっていると。

自分の都合の良いように振舞うことは許さないと。

だが、一介の講師にしか過ぎない真実は、そんなことを言うにはあまりにも無力すぎた。

「……………」

ついに真実は言葉を失った。仮に本音を言ったところで、鈴川の怒りを買い、職を失うことには変わらない。

「佐伯先生には本当に申し訳ないと思っています。せめて今後1ヶ月程度は楽に暮らせる分の給料は支給させていただきますからね」

「1ヶ月？」

思わぬ返答に鈴川は目を見開いた。しかし、それは返答に驚いたのではなく、その声の主に驚いたのだ。

「1ヶ月で次の仕事を探せっていうの？この不況の時代に無茶なこと言うねえ」

その声は、校長室全体を柔らかく包み込むような響きを持っていた。真実も驚いてきょろきょろと部屋を見回す。

「ここ。ここだよ、真実ちゃん」

真実が鈴川のソファを見ると、先ほどまでは確かに何もなかったはずの場所に、源次郎があたかも最初からいたかのように座っていた。

「源次郎!？」

鈴川も真実につられて自分の隣を見た。

「ひああああああっ!!」

源次郎と目が合った瞬間、鈴川は勢いよく立ち上がり真実のソファの後ろに隠れた。

「さ、佐伯先生！なんとかしてくれえ！」

「あれ、校長先生にも見えてるんですか？」

源次郎に怯える鈴川があまりにも滑稽で、真実は笑いをこらえるのに必死だった。

源次郎はいつもの陽気な笑顔で言った。

「なんかおもしろそうな話してるから、俺も混ぜてもらおうかと思って出てきちゃった。で、何の話してたの？」

「あー…」

真実は説明しようとするが、後ろの鈴川がうるさくてなかなか言葉がまとまらない。

「は、早く！私はまだ死にたくない！ましてや呪い殺されるなどまっぴらだ！」

源次郎も真実と同じ気持ちらしく、にやにやといたずらっぽい表情で鈴川を見た。

「まあまあ。そんな冷たいこと言わないでよ。ところでこれ何？退職届とか書いてあるけど？」

「あ…あ…」

鈴川は声にならぬ声を上げ真実の後ろで震えている。

真実はため息をついた。

「保護者の方からクレームがあったらしいのよ。私をやめさせてほしいって」

「ええ？真実ちゃんを？」

恐らく一部始終どこかで聞いていたのだろう。源次郎はわざとらしく大げさに言った。

「やめさせるの？真実ちゃんを？本当に？」

それでも相変わらず鈴川はソファの影にうずくまっており、まったく会話が成立しなかった。

「まあ、クレームがあるならしょうがないけどさあ。真実ちゃんいなくなったら、3年6組の生徒は怒るだろうなあ」

「...え？」

源次郎の言葉に、ようやく鈴川はわずかに顔をあげた。

「俺たち、真実ちゃんのこと大好きだからね。いなくなったら何しちゃうかわかんないなあ。しかも、誰がやめさせたのかもわかってるし、どうなっちゃうんだろうなあ」

鈴川はすくっと立ち上がった。その顔は真っ青で、恐怖に引きつっていた。

「な...何をするとするんだ...？」

「え。だからわかんないってば。ただみんなすごく怒ると思うけど」

源次郎も本当に悪意があるわけではないので一瞬考えたが、とりあえず鈴川を脅すために適当なことを言った。すると鈴川は、無言になり、しばらく校長室には沈黙が続いた。

真実は少し鈴川のことが心配になりちらっと源次郎を見たが、怖がらせた本人は罪悪感のかけらもないらしく、平気そうな表情で鈴川を眺めていた。

やがて鈴川が口を開いた。

「わかった...。佐伯先生を解雇するのはやめよう...」

「ホント？ありがと。さすが話がわかるね」

源次郎は立ち上がると満足そうに言った。鈴川はうめき声をあげながらソファの背もたれに両手をつき、がっくりと俯いていた。

「じゃあ、真実ちゃん、俺教室戻るね」

「あ、うん...」

なんだかあっさりとして鈴川が折れてしまったため、真実は拍子抜けしてしまった。それに、突然源次郎が人前に姿を現したことも信じられない。こんなことをするとは思ってもいなかったのだ。源次郎は意気揚々と校長室を出て行ったが、真実は鈴川になんと声をかけていいのかわからずにその場に立ち尽くした。このまま放っておいてもいいものかと思案するが、慰めたり励ましたりするのなんだからおかしい。

すると鈴川は弱々しい声で言った。

「君も...出て行ってくれ...」

「あ...はい...」

鈴川は源次郎だけでなく、真実に対しても恐怖心を抱いているようだった。源次郎はもちろん、3年6組にいる霊は悪霊ではない。しかし、彼らを悪霊と捉え、利用しようとしてまでしている鈴川に、真実はどこか同情した。

この人には何もかもが歪んで見えているのだろうか。

真実が校長室を出ると、源次郎は廊下の角で突然飛び出してきた女子生徒とぶつかり謝って

いた。

「源次郎！」

真実の呼び声に源次郎は一度振り返ったが、にっこり微笑むと何も言わずに歩いて行ってしまった。女子生徒は掃除中だったらしく、ほうきを持ったまま真実に近づいた。

「佐伯先生、今の何年生？」

「え？あー...一応3年生だけど...」

「ホント？あんな人いたっけ？」

女子生徒は、他の女子生徒を振り返って言った。源次郎は江戸時代の生まれだが、現代でも十分通用する整った容姿を持っている。そのためか、女子生徒たちの興味を引いたのだろう。

一方の真実は源次郎が何を考えているのかまったくわからなかった。鈴川の前に姿を現したのは自分を助けるためだと推測できるが、他の生徒の前にも姿を現し、しかもわざわざ自分の存在が印象に残るように接触していく理由が見当たらない。

「何組の人なの？」

女子生徒の言葉に真実ははっとした。

どうやら源次郎の狙いはこれのようだ。

「6組だよ。びっくりでしょ。まさかみんなの前にも姿を現すなんて」

「うそ？サンロク？意外と普通の人じゃん」

女子生徒たちは顔を見合わせる。同じ掃除の班と思われる男子生徒たちも寄ってきた。

「どうした？」

「サンロクの人見ちゃった。なんか普通すぎて全然幽霊って感じしなかったよ」

「マジで？」

たちまち生徒たちは盛り上がり廊下は賑わう。真実は不思議そうに生徒たちに聞いた。

「サンロクって何？」

「先生6組の担任なのに知らないの？」

1人の男子生徒が笑いながら説明した。

「3年6組のこと、俺らはそう呼んでるんだよ。あんま先生でサンロクって言う人いないけどね」

「サンロク...」

真実は呟いた。

悪くない。

なぜか妙にこの呼び方が気に入った。

「いいね、サンロクね。私もこれからそう呼ぼう」

「うん。先生も私たちの仲間入りだね」

「仲間？」

真実が聞き返すと、女子生徒は照れたように笑った。

「すみません、訳わかんないこと言っちゃった。でもなんかそんな気がしたの」  
周りの生徒たちはおもしろがって、「何？仲間って。」と次々につっこむ。

そのとき、鐘が鳴り、生徒たちは騒ぐのをやめた。

「部活の時間だ。急がなきゃ」

「佐伯先生、私吹奏楽部なんだ。7月に定期演奏会やるから来てね」

「わかった。場所とかあとで教えてね」

生徒たちは掃除用具を片付けると、それぞれの活動場所へと向かって行った。源次郎のおかげで、生徒たちと真実の距離はぐっと縮まったような気がした。

それから数日もしないうちに、源次郎の噂は学校中に広まり、ついには休み時間のたびに3年6組の様子を見に来る生徒まで現れ始めた。

ある日の放課後、真実が教室を整理していると、3年2組の生徒が2人やってきた。

「佐伯先生、今サンロクの子いますか？」

ショートヘアをかわいらしく切りそろえている女子生徒が入口から声をかけた。

「あ、真央ちゃん。遊びに来てくれたんだね」

3年2組は普段から授業をするクラスであり、今の真実はすべての生徒の顔と名前を覚えていた。

「サンロクの子って放課後何やってるのかなと思って。やっぱり部活行くんですか？」

真央の後ろからポニーテールの女子生徒が聞いた。

「どうなんだろう。私にもよくわからないのよ。真央ちゃん、春花ちゃんも、中に入っておいで」

真実が言うと、怖がる様子もなく、むしろ興味津々といったように2人は中へ入った。

すると一瞬、真央と春花はよろめいた。

「わっ。何これ」

「大丈夫大丈夫」

視界がぐらついたのだろう。真実は自分も最初はそうだったと思いながら笑った。

「慣れないうちは教室入るとそうっちゃうのよね。ほら、見てごらん」

真央は眩暈のような感覚から解放されると、真実が指す方向を見た。春花もゆっくりと顔をあげる。

「あ！」

2人は驚愕の声をあげた。そこには、先ほどまでは確かにいなかったはずの3年6組の生徒が4人いた。

「ほ、本当にいた...」

驚いているのか、春花はそう呟くとその場に立ち尽くした。一方の真央は、喜んで4人にかける。

「本当に会えるなんて最高！何してるんですか？」

3年6組の4人は、1つの机を囲むようにして座っていた。真央がはしゃぐのを微笑ましく思いながら源次郎は答えた。

「大富豪だよ。大貧民は大富豪にジュースおごるの。一緒にやる？」

真央は源次郎の笑顔にすっかり心打ち解けて感激していた。

「やります！春花も一緒にやる！」

「ああ、うん…」

どぎまぎしている春花を見てウメは思わず笑った。

「大丈夫だよ。ウチら取って食いはしないから」

すると貴文は口をとがらせて言った。

「いや、俺は悪霊だし。おまえらみたいなおとぼけ幽霊と一緒にすんなよな」

「始まりましたね。貴文さん。いつまでもそんなことを言っていては、女の子にもてませんよ」

藤の宮は小さな口を上品に隠し、かわいらしく笑った。

3年6組は、確実に生徒たちに認められていった。3年6組を悪霊として扱う生徒は、誰1人いなくなっていた。

\*\*\*\*\*

こんな状況になったので、貴文の未練の原因となっている、中島の観察がより行いやすくなっていた。時には生徒のほうから情報をくれることさえあった。

「先生、中島先生がまた愛のこと怒鳴ったんだよ。なんか最近イライラしてるみたい」

その日は雨が降っており、湿気のせいからか学校全体がだらけているような雰囲気醸し出していた。真実は、1時間目の授業の後に聞いた生徒の言葉を思い出しながら職員室へ向かう。昼休みも中島を観察しながら食事を摂るつもりだった。小さなことでもいいから何か手がかりをつかみたいと気持ちばかりが焦っていた。

自分の席に座って少しすると、突然周りの空気が変わった。恐らく他の人間にはわからないだろうが、真実はその変化を敏感に感じ取り、入り口を見た。

そこには思った通り、3年6組の一員であるウメが立っていた。いつも通り派手なメイクだが、今は険しい表情をしているせいかよけいに濃いように見える。

「おまえ、これはなんなんだ？」

職員室のもう1つの入り口から中島の声が聞こえた。彼の手には進路調査票が握られていた。

「あの…今の私じゃ難しいかもしれないですけど、私その大学に行ってみたいんです」

恐る恐る答えたのは愛だった。隣には珍しくちいこもいた。愛が中島に何か言われるとき、あまり近くにいたことはなかったはずだ。

「バカかおまえは？今どころか、どんなに勉強したところでおまえじゃ無理に決まってるだろう？」

中島の声は無機質で、温かみのかけらもなかった。愛は泣きそうになるのを必死でこらえ、黙っていた。すると、震えながらちいこが大きな声を出した。

「そんな言い方ないでしょ！先生に愛ちゃんの何がわかるの？愛ちゃんがどれだけ頑張りやさんかも知らないくせに！」

本人は精一杯声を荒げて怒鳴っているのだが、体が小さいせいか、なんだか子どもが叫んでいるようにしか見えなかった。他の教員たちは、間に入るべきか否かを考えたためらっているようだ

。

「ちいこ...」

呟いたのはウメだった。必死に友達を守ろうとするちいこを、祈るような眼差しで見つめる。

今までなかった展開に中島は驚いていたようだが、結局ちいこのことなど相手にせず、席へ戻ろうとしたさすがに黙ってはいられない。真実は椅子から立ち上がり、中島の机へと近づいた。

「あの...中島先生。いくらなんでも言い方が悪いんじゃないですか？」

愛はこらえ切れなかったのか、涙をこぼし始めた。ちいこは愛を見上げて元気付ける。中島は冷たい視線を真実に向けた。

「申し訳ありませんが、これがうちのクラスの教育方針です。新任講師のあなたにはわかりないでしょうが」

こんな冷たい人間が貴文の友人だなどとはまったく信じられなかった。真実は恐怖で脚が震えていたが、生徒たちの手前じっとこらえて反論した。

「確かに私は教育のことなんてまだ何もわかりませんが、生徒たちの気持ちも考えてください。これから頑張ろうとしているのに、担任のあなたが味方にならないでどうするんですか？」

中島は立ち上がった。近くで見ると真実より頭1つ分背が高く、威圧感があるようだった。

「首をつっこまないでください。佐伯先生はご自分の3年6組の生徒のめんどうを見ていればいいんです。あなたが本当に靈感を持っているかどうかなんて知りませんがね」

そう言い捨てると、中島は踵を返し職員室を出て行った。誰も何も言うこともできず、しばらくの沈黙が続いた。

「あの...佐伯先生...」

小さな声で呟くと、ちいこはしばらく真実を見ていたが、何も言わずに愛の肩を抱いて部屋を後にした。

「.....」

真実はその背中を見送ったあと、ため息混じりに自分の席を振り返った。すると、そこには貴文が痛々しい表情で立っていた。

「あいつ...ホントにどうしちゃったんだよ...。あんなやつじゃなかったのに...」

それだけつぶやくと、ふっと貴文は姿を消した。

真実はウメと顔を見合わせ、貴文が立っていた自分の席を見つめた。

当然のことだが、貴文は悪霊ではない。それどころか友人思いの心優しい霊なのだろう。恐らく、幼い頃の中島との記憶が大切なあまり、今の中島を認めることができず苦しんでいるのだ。それが貴文のこの世への心残りなのかもしれない。そうなると、貴文の問題を解決するには、現実を直視させるという残酷な行為をしなければならない。

真実はなんだか後味が悪い終わり方をしそうな、嫌な予感を感じ始めた。

\*\*\*\*\*

「今度は何のことで怒鳴られたの？」

真実はちいこに聞いた。

今日は朝から雨が降っていて湿気が鬱陶しい。

愛はちいこの隣に座り、涙を目にいっぱいためている。

最近の放課後の3年6組は、まるでお悩み相談室のようになっていた。

職員室での一件以来、ちいこはぐんとたくましくなった。今も言葉に詰まる愛に代わって、真実に状況を説明していた。

「やる気がないやつは生きる資格がないって言ったんだよ」

「な、何それ？ どうしてそんなこと言われたの？」

真実が心配そうに愛の顔を覗き込むと、愛は細々とした声で話した。

「この前の小テストで、ちょっと悪い点取っちゃったんです…。そうしたら中島先生がみんなの前で私のこと…」

愛はこらえきれなくなり涙を流した。

「マジかよ。あいつ頭おかしくなったんじゃないか？」

遠巻きに聞いていた貴文が近寄ってきた。生徒たちにとって、3年6組の生徒が身近にいるのもう当たり前の環境である。

ふと、真実は、愛が学年でもトップクラスの成績を誇っていることを思い出した。

「もしかして、普段良い点取ってるから、悪い点取ったのが納得いかなかったのかな？」

「だからってひどいよ。いつも愛ちゃんばかりきつく言われるんだよ。他の子には冷たい対応しても、怒鳴ったりしないのに」

真実は貴文の顔を見た。藤の宮も遠慮がちに、しかし心配そうに教室の隅からこちらをみている。ウメはちいこに姿を見られたくないのか、席をはずしていた。

そして、なぜか源次郎もこのときは教室にはいなかった。

「何か愛に対して他の生徒とは違うものを感じているんだろうなあ…」

貴文は腕を組んで考えた。中島は貴文の幼馴染である。この中で中島のことを1番よく知っているのは貴文だ。

「うーん…。そういえば、昔からあいつ俺にだけは風当たり強かったっけ…」

「仲良かったときも？」

「うん。なんか張り合ってるって感じだったんだよなあ。俺も負けず嫌いだから応戦してよく喧嘩になってたけど」

すると、ちいこが何か考えながら口をはさんだ。

「あのね、4組にも中島先生からしょっちゅう怒鳴られてる男の子がいるの。その子はすごく運動できて、部活でも全国大会行ったりするんだよ。中島先生って、トップを取る人が嫌いなのかなあ？」

真実と貴文は考え込んだ。1位を取る生徒が気に入らないから怒鳴りつけるなど、本来大人の教員がすべきことではない。それに、中島が優れた生徒たちに嫉妬しているとも考えにくかった。

「創路ってさ、なんでもできるんだよ。」

ぽつりと貴文がつぶやいた。

「勉強も、スポーツも、何でも…。だから、自分がコーチにでもなった気分なのかな」

真実が貴文の顔を覗き込んで言った。

「それか、貴文君のような存在を探しているのかもしれないね」

意外な言葉に、誰もが真実を見た。

「だって、その何でもできる中島先生がライバル視していたのが貴文君だったんでしょ？ 貴文君がいなくなって、寂しいんじゃないかなあ？」

「まさか。俺の葬式にも来なかったんだぞ？」

貴文は苦々しい顔で言った。再びみんな考えこみ、沈黙が流れる。

すると、ちいこが明るい声で言った。

「よくわかんないけど、もしかしたら中島先生は、愛ちゃんのこと認めてるからキツイこと言うのかもね」

「そうかなあ…」

愛はまだ浮かない顔である。

「うん、きっとそうだよ。中島先生が貴文君みたいな存在を探しているなら、私たちがそうになってあげようよ。きっと中島先生もすごく辛くて苦しいんだよ」

「うん…。でも…私中島先生怖いよ…」

「大丈夫、私も一緒に頑張るから。…まずは愛の成績に追いつかなくちゃけどね」

ちいこのおかげで場の空気が和んだ。真実は少しほっとして言った。

「そうだね。中島先生が何を考えているかわからないけど、ライバルのような存在になろうとするのはいいかもしれない。特に、愛ちゃんは中島先生に立ち向かうことで強くなれる気がするし」

実際、愛はいつもちいこの後ろに隠れて歩くような生徒だった。どこか自信なさそうで、うつむいているような。真実は自分のクラスの生徒ではないものの、以前から愛の弱気なところが気にかかっていたのだった。

愛はおずおずと顔をあげた。

「そ、そっか…。私、ちいこちゃんが一緒なら頑張れるかもしれない…」

「うん！ 中島なんか見返してやろう！ だからさ、今日愛ちゃん家行っていい？ さっき出された課題教えてー」

ちいこの言葉にようやく愛は笑顔を見せた。

「わかった。じゃあ帰ろうか」

真実はそんな2人の様子を見て微笑んだ。貴文の心残りがいつまで経っても晴れないのは気にかかるが、前に進もうとする2人が頼もしく見えた。

「気をつけて帰るんだよ。まだ雨降ってるから」

真実はそう言いながら窓の外を見た。

「…と思ったけど、もう上がったみたいだね」

\*\*\*\*\*

美しい夕日がすべてを染める。雨に洗われたあとの世界は幻想的な光を放っていた。

教員は部活動の指導に行ったのか、職員室にはほとんど人はいない。

そんな職員室のベランダで、源次郎は手すりにもたれかかりうつむいていた。

「ここにいたのか、源次郎」

そう言ったのは貴文だった。ふわふわと空中を漂いながら、源次郎の隣に降り立つ。

「ありがとな。ちいこと愛に俺たちが見えるようにしてくれて。大丈夫か？」

「ん…。大丈夫」

職員室のすぐ真上が3年6組である。靈感のない生徒たちが源次郎や貴文を見ることは普通できない。その問題を解消しているのが源次郎だった。

「おまえもすごいよな。そこにいる人たちの霊力を調整して全員に姿が見えるようにしてるんだから」

「すごいでしょ。真実ちゃんは全然ほめてくれないけど」

「そりゃあ真実先生、おまえが頑張ってるの知らないからな」

源次郎はわずかに顔をあげた。顔色が悪く、今にも消えてしまいそうな儂さを感じさせる。

「おいおい、おまえ本当に無理しないほうがいいぞ。俺はよくわかんねえけど、霊力を調整するのってすごく難しいんだろ？」

「たぶん。俺もよくわかんない。でも体の負担になることだけは確か」

「その体も俺たちにはねえだろうが」

貴文の突っ込みに源次郎はふっと笑ったが、また腕に額を乗せうつむいた。

そのとき、職員室の大きな窓が開き、男性教員がベランダに出てきた。貴文はぎょっとしてその男を見た。

中島創路である。

「……………」

貴文の様子が変わったのを感じ、源次郎は体を起こした。貴文とまったく同じように硬直する。

「お、俺たちの姿は見えてないもんな？」

「も、もちろん。なんで動揺してるんだろ」

先ほどまで3年6組で話題になっていた人物なので、中島からは見えていないとわかっているけども、なんとなく気まずかった。

中島はおもむろに煙草を取り出すと、ベランダの手すりに寄りかかり、静かにため息をついた。美しかった夕日は沈みかけ、藍色の闇が迫っていた。

源次郎と貴文は無言で顔を見合わせた。今まで中島の本心を知るため、2人は何度か彼を尾行したことがある。授業中、休み時間、放課後、ときには自宅にまで着いて行ったこともあった。今、中島がしているように、一服中の様子を観察したこともある。だが、どんなときの中島も、生徒の前での様子と変わらなかった。冷徹で、淡々と無表情にその場で過ごす。そんな印象を受けていた。そのたびに源次郎と貴文は、何の糸口も見つからないことにがっかりし、中島の本当の

気持ちを知らぬのを諦めようとしたのだった。

しかし今は違う。

俯き何か物思いに耽るように煙草を吸う姿からは、いつもの中島とは明らかに違う感情が見てとれた。

貴文は源次郎の顔を見た。

源次郎は貴文の考えを読み取ろうとその瞳を見つめ返す。貴文は決心したように一度頷くと、中島の隣へ寄った。

「創路。聞こえるか？」

貴文はこの学校に来てから初めて中島に語りかけた。中島は何の反応も見せず、相変わらず憂鬱そうな顔で煙を吐いている。それでも貴文は言葉を続けた。

「おまえ、生徒にすっげえ嫌われてるぞ。創路らしくないじゃんか」

源次郎は中島に何か変化が起きないか注意深く見つめた。

「真実先生が言ってたよ。創路が俺みたいな存在を探してるって。そうなのか？」

ふいに、中島は煙草を口に運ぶ手を止めた。そのまま手をベランダの手すりの上を下ろすと、考え込むように目を伏せた。

「葬式にも来なかったくせに…。今さら俺みたいなのを探してるってなんなんだよ…。そんなの許せねえよ…」

貴文は中島と同じように手すりに腕を置いた。まるで2人は迫り来る闇を前に、思い出を語り合っているかのようだった。

「なんで来てくれなかったんだよ…。俺だって言いたいこといっぱいあったんだぞ？喧嘩の1つもやりたいくらいだった。親も泣いてくれてすごく辛かったけど、会場中おまえのこと探したんだからな。来てくれると思ったからさ」

中島はまるで貴文の言葉を受け止めているかのように黙り込んでいた。

「それでさ、みんなが寝静まった頃、気になっておまえの家まで行ったんだけど…。自分でも呆れたよなあ。なんでこんなに創路にこだわるんだろうって」

中島は動かない。

静かに話を聞いているかのように。

「あんときびっくりしたよなあ。バカじゃないのかっていうくらい、おまえ泣いてんだもん」

風が、吹いた。

暖かい風だった。

貴文は笑った。

「創路、気づいてた？そのときずっと呼んでたんだけど。ちょっと笑っちゃったけどな。おまえ、すごいぐちゃぐちゃになって何泣いてんだよって。大丈夫だから顔あげろよって」

貴文は何か堪えるように空を見上げた。今でも鮮明に中島の部屋が思い出せる。ベッドの上うつ伏せになり、ただただ泣きじゃくっていた中島。大丈夫だから、と言いつけることしかできなかった。何と言っていいのかわからなかったのだ。言いたいことはたくさんあったのに、まったく整理がつかなかった。

「なあ...」

貴文が中島に呼びかけた。

そのとき、まるで呼応するかのように中島は僅かに顔を上げた。

「ごめんな。俺だけ先に来て」

中島ははっと息を呑んだ。

何かを探すように辺りを見回す。

ずっと様子を見ていた源次郎は、中島の反応に驚き目を見張った。

貴文はそんな中島を見て小さく笑った。

「聞こえてんのか？ここにいるよ。」

中島は隣を見た。

ゆっくりと手を上げ、空間を探るように動かす。

貴文も中島のほうへ、そっと手を伸ばした。

2人の指先が重なる。

触れられないはずの温もりが中島に伝わる。

「貴文...。ふざけんなよ...」

中島は泣き崩れ、その場にうずくまった。

優しい夜が、辺りを包んでいた。

\*\*\*\*\*

次の日の朝、中島は廊下でちいこと愛を見かけるなり声をかけた。

「おい、2人とも、今職員室に来れるか？」

突然のことにちいこも愛も身を強張らせる。

「あの...はい...」

なんとかちいこが答えると、中島はさっさと職員室に向かって歩いて行った。

「どうしよう、ちいこちゃん...」

「大丈夫。何も怖がることはないよ。私も一緒に行くからね」

中島から声をかけてくるのは珍しい。それだけに、何を言われるのかまったく見当がつかなかった。重苦しい雰囲気の中2人が職員室の前で待っていると、中島が2冊の本を持って出てきた。

「おまえらにやる」

「は、はあ...」

困惑しながら受け取ると、数学の問題集だった。

「志望校に行きたいなら2人とも数学を強化しろ。他の科目はまずまずだが数学が弱すぎる。おまえたちが希望する大学のレベルに合った問題集だから、最低でも3回は全部解け」

いつものように無表情で話す中島だが、照れているのか、どこか戸惑っているようにも見えた。ちいこも愛もぼかんとしていたが、顔を見合わせると嬉しそうに微笑みあった。

「あの、ありがとうございます」

2人はそう言うと、屈託のない笑顔の中島に見せた。予想外の反応に中島は一瞬硬直したが、すぐに2人につられてぎこちない笑みを浮かべた。

「よかったねえ、ちいこ」

教室へ向かう2人の後姿を見ながらウメが呟いた。真実も廊下の角からひょっこりと顔を出してうなずいた。

「たぶん、これで貴文君の心残りはなくなったよね」

ウメは静かに笑った。

「そうだね。ちいこの成長はこれからなのに、最後まで見届けられないのは残念だけどね」

すると、まるでその声が聞こえたかのようにちいこが廊下の端で振り返った。だが、ちいこには真実しか見えない。

一瞬ちいこは考え込むような仕草を見せ、廊下の真ん中くらいまで駆けて来ると、首を傾げた。

「佐伯先生。あの...なんか変かもしれないんですけど、見守ってくれてありがとうって伝えておいてもらえますか...？」

本人は自分がなぜこんなことを言っているのかわからないらしく、不思議そうな顔をしていたが、すぐに愛の方へ振り返り、廊下を歩いていった。

「だって。ウメちゃん」

真実がウメを振り返ると、ウメはくっくっと笑いを堪えていた。

「私の顔も覚えてないくせに、案外鋭いところもあるんだねえ」

ウメは言い終えると、まるで真実に顔を見られるのを嫌がるようにさっさとその場を離れた。

真実は1人になり、そのまま廊下で佇んだ。

3年6組との別れは、確実に近づいていた。

\*\*\*\*\*

午後の日差しが眩しい。

実は源次郎は、家庭部の所属である。

といっても、自分で勝手にそう決めただけで、いつも家庭科室で活動している生徒たちには認知されていないのだが。

今日も源次郎は家庭科室の隅で、女子生徒がはしゃぎながらお菓子を作るのと、男子生徒が自分の料理の味を追求する様を眺めていた。

「源次郎さん」

ふいに声をかけられ顔をあげると、藤の宮が立っていた。

「遊びに来てくれたの？」

「はい」

藤の宮はそう言うと、源次郎の隣に座った。

「あの...佐伯先生が怒ってましたよ。最近授業やホームルームの欠席が多たって...」

「ホント？俺嫌われちゃったかなあ」

源次郎は困ったような笑顔を浮かべたが、まったく反省はしていないようだった。

「みなさん楽しそうですね」

「うん。なんかここにいるとさ、時代は変わったなあって思うんだよね。男の子が料理作ったり裁縫するなんて、俺の時代は考えられなかったもん」

「私の時代は、御簾を隔てずにこうして男女が直接お話することも考えられませんでしたわよ」

「それもそうか」

源次郎はくすくす笑うと、またぼんやりと生徒たちを眺めだした。藤の宮は源次郎の横顔を盗み見た。

元々源次郎はある種の儂さを感じさせる人間だった。色白で、顔立ちが整っていて、時折り美しささえ漂わせているようだった。しかも、その儂さは、強まってきているように見えた。今にも消えてしまいそうな、弱々しいものが見え隠れしていた。

「自分を...責めないでください...」

気が付くと、藤の宮はそんなことを口走っていた。

「ん？何？」

源次郎はきょとんとした顔で、藤の宮を見た。藤の宮は一瞬戸惑うような素振りを見せたが、すぐに言葉をまとめた。

「初めて源次郎さんにお会いした日から感じてたんです。源次郎さんは、なんだか自分を責めているような気がします」

「そう...かなあ？」

心当たりがない源次郎は、視線を泳がせながら考えた。それでもやはり、藤の宮がなんのことを言っているのかわからない。

「そういえば、藤の宮は俺の想いに惹かれてこの学校に来たんだよね。俺も自分で何が心残りなのかわかんないけど、この世に縛り付けてごめんね」

「いえ、それは決して源次郎さんが悪いわけではないのですが...」

源次郎の笑顔はどこか悲しそうだった。自分のせいでみんながこの世に留まっているのだと考え、思い悩んでいるようだ。

「初めて会ったときから、源次郎さんは自分を追い詰めているようでした。みんながこの世に残っているのは源次郎さんのせいではありません。気に病むことはないと思いますよ」

「ありがとう。早くあっちの世界に行けるといいんだけどなあ」

源次郎が自分を責めているのは、みんなを巻き込んでいることが原因ではないようだった。何の根拠もないことだが、藤の宮は直感的にそう思った。

\*\*\*\*\*

ここ数日、暑い日が続いている。しかし期末テスト直前のためか、だらけている生徒はいなかった。

真実はいつも通り3年6組での帰りのホームルームを終わらせるため、すべての授業が終わったあと教室へ戻ってきた。

以前は教室に入る瞬間、眩暈のようなものを覚えていたが、貴文と中島の一件以来、それはなくなっていた。恐らく貴文の未練がなくなったため、教室を支配する霊力が弱まったからだろう。しかし、なんとなくそれを口にするのははばかりられて、真実は気づいていないふりをし続けていた。

「それじゃ、みんな気をつけて帰るんだよ。テスト期間で部活がないからって寄り道しないようにね」

3年6組の生徒たちも、他の生徒たちと同じようにテスト勉強のため早々に学校を後にするようだ。彼らがどこでどのように勉強するのか真実にはわからないが、ちょっとずつ真実が授業をとしている国語の成績だけは上がっているところをみると、勤勉な生徒が多いようだった。ほとんどの生徒が帰り、藤の宮だけが静かに教科書を読んでいた。真実が教卓の周りの整頓をしていると、教室の扉から声がした。

「先生、源次郎見なかった？」

真実が顔を上げると、そこには貴文が立っていた。なんだか暗い表情をしている。

「教室には戻ってきてないけど...。どこ行っちゃったんだろうね」

最近、源次郎の姿を見かけることが少なくなっていた。中島と貴文の一件以来、ホームルームや授業を欠席することが多くなり、顔を合わせるたびに真実は注意していたのだ。

「俺、今学校中探してみただけど、どこにもいない...」

「そっかあ...。帰っちゃったのかなあ」

「うん...」

貴文の声が重い。真実は心配になって歩み寄った。

「どうしたの？また中島先生と何かあった？」

「いや、そうじゃないんだけど...」

貴文は俯いたまま、真実の目を見なかった。真実が貴文の顔を覗き込むと、今にも泣き出しそうになっていることに気づいた。

「どうしたの？言ってごらんよ」

「うん...」

藤の宮も心配そうに教室の隅から貴文を伺っている。

「俺...先生に言ってなかったことがあるんだ」

その言葉だけで真実も不安になったが、生徒である貴文の手前、なんとか冷静に振舞った。

「うん。何を言ってなかったの？」

「あのさ...」

貴文はさすがのような目で真実を見た。

「源次郎...消えちゃったかもしれない。」

「え...!？」

真実は思わず驚きの声をあげた。藤の宮もゆっくりと席を立ち、静かに2人に近寄る。

「消えちゃったって、どういうことなの？」

真実は優しく貴文に聞いた。

「俺もよくわかんない。ただあいつ霊力使いすぎてたんだ。靈感ない人たちに俺たちのこと見せたり、いつも無理ばっかしてた...」

藤の宮も暗い表情になった。

「確かに、源次郎さんは随分無理をしているようでしたわ。霊力を使い果たしてしまったらどうなるかわかりませんが...」

一気に重苦しい雰囲気になる。真実が貴文と藤の宮との顔を見比べながら聞いた。

「あのさ...、消えるって、魂が消えるってこと...だよな？」

真実は幽霊や霊力に関する詳しい知識は持っていない。

ただ靈感があって、普通の人には見えないものが見えているだけだ。それでも消えるということがどれほどまずいことかは何となくわかった。

「魂そのものが消えちゃったら、もう一度この世に生まれてくることはできないんだよね？」

真実の問いかけに、しばらく2人は無言でいた。

「俺たちも、詳しいことはわからないんだけど...。たぶん、そうだと思う」

一気に血の気が引いていくようだった。源次郎の存在そのものが消えてしまっただけは、たとえプロの霊能力者でも助け出すことはできないだろう。生前の世界からも、死後の世界からも完全に存在が抹消されてしまう。

本当の意味で消えるのだ。

「ち、ちょっと私も探してみる」

言い知れぬ恐怖に駆られ、真実は教室を飛び出した。

「俺たちも探そう。俺は3階から見ていくから、藤の宮は1階から見てくれるか？」

「わかりましたわ」

真実は、普段なら霊力が強い源次郎と貴文の居場所だけは、どんなに離れていてもなんとなく把握できていた。しかし今は貴文の居場所しか伝わってこない。2階の教室を小走りで見回っていると、後ろから名前を呼ばれた。

「佐伯先生、どうしました？」

真実が振り返ると、そこには中島が立っていた。

つい数日前までは常に怖い顔をして歩いていた中島だったが、その表情はかなり穏やかになっていた。

「中島先生、あの...」

真実は駆け寄り中島にすがりついたが、何と説明すればいいのかわからない。説明したところで、悪霊が1人いなくなっただけでよかったなどと言われるのも嫌だった。

しかし中島はゆったりとした声で言った。

「落ち着いてください。6組の生徒に何かありましたか？」

中島は静かな瞳で真実を見た。真実は中島の意外な言葉に驚きながら、涙声で言った。

「生徒がいなくなっただけです。どこを探してもいない...。消えてしまったかもしれないんです」

「学校全部探したんですか？」

「はい…」

「屋上も？」

「屋上…」

真実は一瞬となった。屋上には普段鍵がかけられているが、幽霊である源次郎には関係ない。

「佐伯先生は先に屋上に行ってください。俺は鍵を取ってきますから」

「は、はい」

中島はすぐに踵を返し、ずんずんと職員室へ歩いて行った。思わぬ助けに真実は少し混乱しながらも、なんとか屋上へ向かった。

屋上へと続く階段は、とても静かだった。特別な用事さえなければ、いつもは誰も近づかない。真実は階段を上りきると、扉に耳を当てた。これだけでは外に人がいるかどうかもわからない。源次郎の気配を探ってみても、溢れ出るようなあの霊力は感じられない。

間もなく、下から軽快な足音が聞こえた。

「待たせましたね。開けますよ」

中島はすぐに屋上の扉を開けた。

夏は日が長い。もう夕方の時間だが、いまだに辺りは明るかった。

「生徒はいますか？」

きよろきよろする真実に中島が聞いた。

「い、いないです…」

鼓動が早くなる。

嫌な予感だけが胸に沸き起こる。

2人はそれぞれ屋上を歩き回ったが、源次郎が姿を現すことはなかった。

やがて真実は手すりに腕を寄せ、無言でうなだれた。

中島も隣に立ち、同じように手すりに寄りかかりながら下を向く。

真実が掠れた声で呟いた。

「どこに行っちゃったのよ…。ばか源次郎…」

「ちょっと。ばかってどういうこと？」

真実と中島は驚いて声がしたほうを見た。

中島がいない方の真実の隣には、手すりに体を預けながら笑う源次郎がいた。

「源次郎…！」

真実は緊張の糸が切れたように、泣きながら源次郎に抱きついた。

「わーい。真実ちゃんからくっついてくれたー」

源次郎は明るい声でいつもの軽さを発揮する。真実はこのときばかりは注意することもなく、そのまま源次郎にしがみつき泣いていた。

「あ、中島先生、真実ちゃんのこと助けてくれてありがとね」

中島は突然声をかけられ、ビクッと体を振るわせた。

「き、君は本当に霊なのか？まるで生きている人のようだが…」

「そう？でも中島先生は靈感強くないから俺には触れないと思うよ。さすがに俺も今は姿見せるのが精一杯だし...」

すると真実は急に源次郎から離れて、涙で濡れた顔で訴えた。

「源次郎もうやめて！そんな無理してまでみんなの前に姿現さなくていいよ！」

「え？」

源次郎はきょとんとして真実を見た。

「私、貴文に聞いたんだからね！どうして今まで言わなかったの？霊力使いすぎて消えちゃったらどうするのよ！」

中島は貴文の名前が出てきたことに一瞬反応していたが、今はその話をするべきときじゃないと思ったのか黙っていた。

「あ、そのことね。大げさだなあ。消えるわけないでしょ。本当にやばいときは霊力使わないで温存してたんだから」

「ホ、ホントなの？」

「当たり前でしょ。魂疲れて生まれ変われなくなっちゃうじゃんかあ」

真実は自分たちの考えすぎだったということに気づきほっと胸を撫で下ろした。すると同時に、止まっていた涙がまた溢れ出てきた。

「あー、よしよし、泣かないの。こんなに小さい子泣かせたらおじいちゃん笑われちゃうでしょー」

江戸時代に生きた源次郎は真実から見ればとてつもなくおじいちゃんということになる。源次郎なりに真実を笑わせようとしたようだった。

「佐伯先生、見つかってよかったですね。俺は戻りますから、あとは2人でゆっくり話してください」

「はい...。ありがとうございます」

真実はポケットからハンカチを取り出し、顔を隠しながら中島に一礼した。

中島が屋上から出て行ったあと、まだしゃくりあげている真実を見て、源次郎はそっと聞いた。

「真実ちゃん、怒ってる？」

「怒ってるよ」

真実はタオルを顔から離し、キッと源次郎をにらみつけた。しかし源次郎がいつものように儂げな笑顔を浮かべているので、真実もすぐに怒りを収めた。

「いつもいつも教室にいないから心配したでしょ。明らかに霊力も格段に弱くなってるし...」

「うん、ごめんね。ちょっと考え事してたんだ。誰にも邪魔されたくなかったから、完全に気配も絶ってたしね」

そんなことが簡単にできるのだろうかと思っただけだが、とりあえず口にはしないで聞いた。

「いいんだけどさ。無事だったわけだし...」

真実が言うと、源次郎はにっこりと笑って、屋上から遠くを眺めた。

夏の到来を告げるように、様々なセミの鳴き声が響き渡る。

真実はふと、大事なことを見落としていることに気が付いた。

「そういえば…。考え事って何なの？」

源次郎は答えなかった。

どう説明したらいいのかわからないといった様子だった。

「まあ…。言いたくないなら良いんだけど」

真実は源次郎と同じように遠くを眺めた。

爽やかな風が辺りを吹き抜ける。

「ん…。そうじゃないよ。あのね…」

源次郎は視線を泳がせた。

「消えちゃうのかなって…」

真実はぎょっとした表情を浮かべた。さっきまで消えるはずがないと言っていたのに、いきなり前言撤回されたのだ。

「ち、ちょっと、さっき言ったことと違うじゃない！」

「あ、違うよ。そのことじゃなくてさ…」

源次郎は困ったように笑った。

「俺が生きていたことって、いつかは忘れられて、俺が生きた証拠も消えていくのかなって…」

「……………」

さすがに真実は何も言えなかった。

源次郎は江戸時代の人間だ。

一個人が生きた証など、平成の時代に残っているのだろうか。

「貴文と中島先生は、次元を越えた友情を持ってるし、ウメとちいこちゃんもすごく強い絆で結ばれてる。それも全部なかったことになるのかなあ。もしそうなら、みんな何のために生きてるんだろう」

源次郎は言葉を切り、暗い声になって続けた。

「俺が死んだ後も、身近な人たちが覚えていてくれるから俺が生きた証拠は残るよね。今だってこうやって真実ちゃんと毎日を過ごしてるから、俺の存在は証明されるよね。でもその後はどうなるんだろう？」

真実は、源次郎の消え入るような小さな声を黙って聞いていた。

「また、霊が見える人と接触してもさ、その人もいつかは死んじゃうよね。その後もまた霊能力者と接触して、自分の存在を忘れて欲しくなくて、何度も繰り返すのかな…」

ふっと、源次郎から小さな嗚咽が漏れた。

「そうやって…いつか俺は悪霊になっちゃうのかなあ…」

源次郎は肩を震わせていた。そのとき真実はようやく源次郎の心残りを見つけたような気がした。

「源次郎…。そんなこと考えてたの…」

源次郎は真実の顔を見た。

その瞳には涙がいっぱいにためられていた。

「こんなのおかしいよね？このまま悪霊になって、生きている人をこっちの世界に引きずり込もうとしたらどうしよう...」

真実は思わず吹き出した。源次郎の純粹で素直なところが垣間見えて、可愛らしく思ったのだ。

「ちょっと真実ちゃん！なんで笑うの？」

「ごめんごめん。そんなこと考えてたのかあって思ってさ」

「もう...。俺は真剣なのにな...」

「わかってるよ」

真実は優しく微笑んだ。

「源次郎は、少し考えをまとめたくてこの世に残っていたんだね。ちょっと立ち止まったくらいで悪霊になんかならないから安心して」

源次郎は真実を見つめた。まるで不安を抱える子どもの瞳そのものだった。

「大丈夫。本当に悪霊になりそうなときは、私が叱ってあげるからね」

源次郎はまだ真実を見ていた。

しばらく見つめあう2人。

日は傾きかけており、涼しい風が心地いい。

真実は自分が生きた証拠など考えたこともなかった。

毎日が必死で、自分を客観的に捉えたこともなかった。

その点、源次郎は真実よりも冷静なところがあるのだろう。一見軽い性格のように見えるが、とても繊細な一面も持っていたのだ。

「真実ちゃん...。ありがとね」

源次郎は、ようやく笑顔を見せた。

「真実ちゃんがそう言ってくれと、すごく心強い」

「そう？ま、これでも一応先生だからね」

真実は内心照れていたが、大人っぽい余裕を見せようとして、にこっと笑ってみせた。

「次生まれ変わったらさ...。真実ちゃんの近くに生まれてもいいかな？」

真実は、人は生まれてくるときに、自分の親を選んでいるという話を聞いたことがあった。詳しいことはわからないが、源次郎はとにかく真実を慕っているようだ。

「もちろんいいよ。側においで」

「うん。なんかすごく安心した」

源次郎は真実に笑いかけた。

いつものように儂い、どこか悲しげな笑顔だ。

自分が生きた証が残るかどうか、真実にはその答えは出せなかった。

出したくないという思いもあった。

それは、どちらにしても、少なからず残酷さを感じたからだ。

答えはなくとも、源次郎は笑顔になった。

今はその事実が一番大切なことのように思えた。

「明日からはちゃんと授業出なさいよ。テストで赤点取ったら容赦なく補習だからね」

「真実ちゃんと2人で勉強できるなら楽しそうだけどね」

「そんな甘いもんじゃないから。覚悟しときなさいよ」

すっかりいつもの源次郎に戻ったようで、真実も笑顔になった。鈴川学園の生徒たちも3年6組を受け入れている。それどころか、親しい存在として捉えている。授業もやりがいがあり、3年6組の生徒たちも前向きに勉強に取り組んでいる。

長くは続かないと知りながらも、今が最高の状態だろうと真実は感じていた。

\*\*\*\*\*

「暑いねー」

「放課後サンロク行こうよ。涼しくて気持ちいいよ」

廊下を歩く女子生徒たちが笑い合っている。期末テストが終わり、いよいよ夏本番に入っていた。3年6組は霊がたくさんいるせいか、他の教室より若干涼しいらしい。

鈴川学園の生徒たちにとって、今となっては3年6組の存在は当たり前のもとなっていた。しかし、校長の鈴川や、教頭の渡辺がそれを良く思っていないのは相変わらずである。朝のホームルームが終わり、真実をはじめ多くの教員が職員室へ向かっていた。その途中、校長室を通ると、中から鈴川と渡辺であろう声が聞こえた。気が付くと、真実は無意識に中島と顔を見合わせていた。授業が始まるまで5分もないのだが、校長室の扉の前で耳をそばたて、中の声が聞こえないかと苦心する。

「結局、責任を負わせる相手がいなくなっていましたね...」

情けない声が聞こえた。

渡辺だ。

「そうだな...。何がサンロクだ。ついこの前まで悪霊だと言って怖がってたくせに、今となっては毎日通う生徒までいるのが信じられん」

鈴川の声も聞こえる。随分いらだっているようだ。

「生徒どもも頭が悪いやつばかりだ。人の言うことに左右されて、悪霊だと言ったり、良い霊だと言ったり二転三転するんだからな」

この言葉を聞いて真実は怒りがこみあげてきた。

どうも生徒のことになると後先が見えなくなってしまう。

中島が止める間もなく真実は校長室の扉を開けた。

「失礼します」

鈴川と渡辺は驚いて変な声を出した。「ど、ど、どうしました？佐伯先生...」

動揺しているのか、声が上ずっている。

「すみません。驚かせてしまいましたか？」

真実はちょっとおもしろくなってしまい、にっと笑った。中島は真実の後ろで必死に真顔を作

っている。

「校長先生、今日の放課後、時間ありますか？6組の生徒が会いたいと言ってるんですけど」

真実は余裕の笑顔を浮かべて言った。鈴川は思いがけない真実の言葉にしどろもどろになった。

「ろ、6組ですか？いやー、私は遠慮させていただきますよ。仕事も溜まっておりますからね」

「そうですか。では私の用件だけ伝えておきます」

そう言うと、真実は急に笑顔を消して、真剣な顔になった。

「もう3年6組を縛るのはやめてください。他の生徒たちがどんなに6組の安らぎを願っても、あなたたちが6組を悪用しようとする限りあの子たちは成仏できません」

鈴川と渡辺は無言で目配せをした。もう何も言い返す言葉もないようだ。

「この学校に様々な不幸を呼び込んだのも、あなたたちの負の気持ちが原因だと思います。あなたたちが変われば学校も変わります」

真実の口調は強いものではなく、穏やかに諭すようだった。

「3年6組の生徒たちを...解放してあげてください」

中島は黙って真実を見守っていた。

しばらくの静寂が校長室を支配する。

そのうちに、授業の開始を告げるチャイムが鳴った。

「失礼しました」

真実はそう言うと、あぐりと口を開けている鈴川と渡辺を残し、校長室を出た。中島も一緒に校長室を出る。

「やりますね。佐伯先生。突然飛び込んで行くとは思いませんでしたよ」

良いものを見たというように笑う中島を見て、真実はようやく自分がしたことに気が付いた。

「そ、そうですよね。私、生徒のことになるとつい感情的になっちゃって...」

「いいと思いますよ。それにしても、校長と教頭が不幸を呼び込んでるだなんて、聞いてた俺もすかつとしましたよ」

冷静になって考えれば、鈴川と渡辺にはとても失礼なことをやってしまったようである。だが今さら撤回はできないので、真実は諦めたように言った。

「ちょっと言い過ぎたかもしれませんが、でもあれは事実なんです。人の想いってすごく強いんですよ。とくにネガティブなものは強いんです」

2人が職員室に着くと、1時間目に授業を持つ教員はすでに誰もいなくなっていた。中島も1時間目には授業が入っていないらしく、まだ話の続きを聞きたがっていた。

「進学率の低下とか、不登校とか、そういうのは彼らのネガティブな感情に呼ばれて来たんですか？」

「すべてがそうではないですけど、引き起こす原因にはなってると思いますよ。リーダーであるべき人がどんよりしてると、その下で働いたり生活する人たちもどんよりしちゃいますからね」

中島はまだ興味津々だった。元々こういう性格だったのか、貴文との一件以来こういうことに興味を持ち出したのかはわからないが、真実にとっては意外な一面だった。

「それじゃあ私、行きますね。もう5分遅刻ですけど、1時間目から授業入ってるんで」

「あ、すみません。引き止めてしまいましたね」

「いえ、大丈夫ですよ」

思った以上によくしゃべるので、真実は驚いていたが、本来貴文と仲が良かったことを考えると、不思議なことではないのだろう。それよりも、中島が以前の性格に戻りつつあるとしたら、自分も少しは役に立ったのかもしれないと思い、嬉しいところもあった。

\*\*\*\*\*

夏休み前の最後の日。

真実は3年6組で前期最後の授業を行っていた。

「帰りのホームルームまでに夏休みの課題書いておくから、提出期限は絶対に守るんだよ」

真実の言葉を聞いた瞬間、貴文は斜め後ろを振り返り、源次郎にちょっかいを出す。

「おまえは絶対間に合わなさそうだな」

「俺は真実ちゃんの言いつけはちゃんと守るよ。貴文こそまじめにやったほうがいいんじゃない？」

このやりとりをきっかけに教室が騒がしくなる。ウメも振り返って一番後ろに座る藤の宮に話しかけた。

「ねえ、藤の宮。私文法苦手だから教えてくれない？古典は藤の宮の時代の言葉でしょ？」

「まあ平安時代以外の言葉も混ざってますが、平成時代に生きる人よりはわかると思います」

「いや、私人生のほとんどを昭和時代で過ごしたんだけどね」

普通の人ならばあまり聞かないようなやり取りを、真実は笑いながら見守っていた。

やがて授業終了を告げる鐘が鳴り、週番が号令をかける。

「起立」

すると、生徒たちは一斉に頭を下げた。

「ありがとうございました」

それは今までになかった言葉だった。

真実が驚いて顔を上げた瞬間、生徒たちは光となって消えた。

一瞬のまばゆい輝きとともに、優しい微笑みが真実の脳裏に焼きつく。

生徒たちがいなくなった教室には、光の粒を湛えた花が一面に残されていた。

\*\*\*\*\*

すべての授業を終え、ホームルームを行うために真実は3年6組の教室へと戻ってきた。

扉を開けると、静寂が佇んでいる。

夏休みの課題を黒板に書く。

古典、現代文、漢文、バランス良く出題範囲に選んだつもりだ。

しかし、書いてみると少し分量が多すぎたような気もした。

最後までやりきれない生徒もいるだろう。

課題を書き終え真実は後ろを振り返った。

笑い声や野次が飛び交うことを期待していたが、やはり教室は花に包まれているだけだった。

\*\*\*\*\*

「おはようございます。佐伯先生」

真実は職員室に入りかけていた体を戻し、廊下に顔を出した。

「おはよう、ちいこちゃん。なんか日焼けしたね」

「はい。愛と海行きまくったんで真っ黒になっちゃいましたよ。あ、ちゃんと受験勉強もやりましたからね」

ちいこの隣で愛が笑った。

「そっか。いいなあ。あとでゆっくり話聞かせてね」

「はい」

ちいこと愛は満面の笑みで言うと、そのまま廊下を歩いていった。すると、2人は中島とすれ違い、何やら楽しげに話しこみ始めた。

職員室の入り口から自分の席を見ると、机には光の粒を乗せた花が顔を覗かせている。あれから1ヶ月近く経つのだが、枯れる気配はまったく感じられなかった。

「おはようございます。佐伯先生」

ぎこちない挨拶が聞こえた。この雰囲気にも慣れたもので、真実は笑顔でこたえた。

「校長先生、おはようございます」

鈴川は何とか笑おうとしたが、表情はとても固かった。

「佐伯先生、実はお願いがあるんです。」

「今度はどの幽霊の除霊ですか？」

「いえ、そういうことではなく...」

真実は冗談のつもりで言ったのだが、鈴川は下を向いてしまった。

「そうではなく、佐伯先生に、本校の正式な教員になっていただきたいんです」

「え？い、いいんですか？」

願ってもない申し出だった。常勤講師のままでは生活は心もとない。安定した収入も得られず、真実は密かに困っていたのだ。

「ええ。佐伯先生が良ければですが...」

「とんでもないです。喜んでお受けいたします。授業などはまだすごく下手ですが、これから一生懸命勉強します」

鈴川はようやく自然な笑顔になり、真実に手を差し出した。

「ありがとうございます。私もたくさん勉強させていただきます。校長として恥ずかしくないように...」

真実はにっこり微笑むと強く鈴川の手を握り返した。

常勤講師だったため、真実は夏休み中ほとんど学校に来ていなかった。少し埃をかぶっているだろうと思いながら自分の席に近づくと、思いもよらない光景に一瞬動きが止まった。

枯れない花を飾る花瓶の前には山積みの問題集があった。まだ朝のホームルームを終えていないのに1クラス分提出されているはずがない。問題集の山の上に、小さなメモが置かれていた。

『ごめん。やっぱり間に合わなかったから、全部解いてから出すね。 源次郎』

真実はしばらくメモを手にとったまま眺めると、花瓶に貼り付けた。

そして1冊問題集を机に開き、丁寧に採点を始めた。

## サンロク

<http://p.booklog.jp/book/59404>

著者：アイス

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ice411/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/59404>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/59404>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ